
真っ黒少女と六つの約束

初花真結

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真っ黒少女と六つの約束

【Nコード】

N5133R

【作者名】

初花真結

【あらすじ】

黒髪の人才、神子リコリス・インカルナタは第二王子アルバートの命で停戦を図り、そこでありえないはずの《自分以外の黒髪》の目撃情報を得る。畏、失意、逆境の中、黒い瞳に消えない炎を宿して彼女は決意する。「許さない。それだけは、絶対に……！」リコリスの過去、黒髪の正体。最強だけどこか脆い少女と、ヘタレだけど何故か頼られてしまう少年の、異世界ファンタジー《激動の第二章》始まる――！

敗者に降る雨

あたりが白く見えるほどの雨が降っていた。雨は先ほどまでの戦いで砕けた地面を容赦なく叩く。

地面を砕いた、二人も。

一人の少女はうつ伏せに倒れていた。長い黒髪が地面に広がっているせいで、表情は伺えない。

少女の黒というには少し明るい深い蒼の軍服は泥にまみれ、長い手袋とブーツに包まれた細い手足は全く動く気配がない。背中は大きく斬られ、そこからとめどなく血が流れている。

完全なる、敗者の姿。

起き上がりたいのに、力が入らない。そんな自分のふがいなさに怒る少女を、一人の人間が見下ろしていた。

黒いフードを目深に被ったその人物は、男女の区別が付かない。その人物は、自らがつけた傷から流れる紅く鮮やかな血が、水溜りを赤く紅く染め続けるのをじっと見続けていた。

少女に息があることは知っていた。そして、今止めを刺せば確実に殺せるであろうことも。

しかし、その人物は何をするわけでもなく、ただじっと見つめていた。

相当な時間が経ったとき、投げ出されていた少女の手がピクリと動いた。フードの人物は驚いたようにピクリと反応し、緩慢な動作で顔を上げた少女とフードの下で目が合った。

「……どう、してッ……」

うめき声ともとれる少女の声。 続いて両手を使って起き上がる
うとするが、すぐに右肩を押さえて倒れた。 次は右に負担をかけ
ないようにしながら、ゆっくりと起き上がる。 不快な感触がする
口の中の泥を吐き出す。

フードの人物は思い出したように一歩、後ずさる。 そしてその
あと背中を向けて走り去った。

少女は顔を上げて、いまだ失われていない戦意をこめた黒の瞳
で、フードの人物が消えた先を睨みつけていた。 しばらくして、
そこに誰もいないことを認めた少女は悔しさに唇をかみ締めた。

少女はまたうつむいて、雨に濡れた黒髪が顔を隠す。
まるで、泥に汚れた自分の顔を隠すように。

「……どうして……」

少女はそう呟きながら、拳に力をこめた。 強い意志をこめた高
い声は、悔しさに満ちていた。 強い意志をこめた高
ジャリ、と握り締めた土砂が音を立てる。

少女はその拳を高く上げて、
「……………ッ！」

水溜りを、容赦なく叩いた。

叩かれた水溜りは高い音を立てて、泥と共にしぶきとして舞い散
り、

雨の中へ、消える。

敗者に降る雨（後書き）

初めての異世界ファンタジー連載になります。拙い文章ですが、いろいろとご指摘・感想いただけると嬉しいです。よろしくお願いします！

？ 三時のおやつはお預けです

ティターニア王国。

今から千年近く前に存在した、魔術に精通し、黒髪を持つ聖女ティターニア。ティターニア王国は、彼女の弟子達が建国したと言われる宗教国家である。

その宮殿の廊下を、貴族達がたむろする中、足早に進む一人の少女がいた。

はしたない、とまるで不発弾を見つけたような顔をしていた貴族たちは、足音の主と翻る黒髪を見て、慌てて表情を変えた。

分厚い水色の封筒を抱えた少女が着ているのは、黒い軍服に最近女性士官の間で流行り出したミニスカート。軍服と揃いのデザインのスカートと丈長のブーツ。

ある伯爵は、彼女と初めて出会ったとき、思わずこう呟いたと言う。

——「人形かと思った」。

北の出身者特有の、雪のような白い肌。少女らしい、柔らかな輪郭。理性的な光を放つ瞳。よく手入れされた黒髪。狂いのない精緻な美しさは、まさに人形。

儚げな印象を強烈な存在感に変えるのは、黒髪と黒い瞳。

この世界では、黒髪黒目で生まれた子は「神子」と呼ばれる。

聖女ティターニアと同じ色を持つからと、生まれた子が皆大きな才能を持つからだ。

彼女は向けられた視線を、これから報告する内容に集中することですべて遮断し、一際大きな扉の前に立つ兵に声をかける。

「第二師団所属、リコリス・インカルナタ大佐です」

「はっ！ 殿下よりお話は聞いております。大尉はお先に行かれました。どうぞ中へ」

答える兵の表情は、何故か疲れ気味。

（……まったく）

「ご苦労様」と心の底から言っていると、兵は疲れた笑顔を見せた。まったくもって同情する。

この扉の先は、王族の居住空間。リコリスは大きく深呼吸をして、中へ入った。

聞きようによつてはそれは、ため息に聞こえなくはなかった。

＊ ＊ ＊

首都の街並みを臨むガラス張りの壁、リコリスの執務室の数倍はあろうかという部屋面積と本棚。

ほぼ執務室に引きこもっていると書いていいリコリスにとって理想の部屋だ。

メイド達によつて毎日整理されるこの部屋は当然、散らかってない。どいない。

だがしかし、今は、今だけは散らかっていない方がおかしいのだ。午後三時。定例会議三時間前。本来ならば、忙しく書類をまとめるなり書き直したりしなければならぬ時間。

しかし、この部屋の主は。

未処理の書類の山はそのままに。書類どころか、塵ひとつない机の上で頬杖について。

「よおりコリス。三時だし、デザートでも食べようぜ」

などと言うものだから。

「こんの……っ、馬鹿殿下——ッ!!」

リコリスは手に持った、鈍器になりかねないほど分厚い封筒（重要書類）を、思いつきりぶん投げた。

「相変わらず容赦ないなお前」

「殿下こそ相変わらぬの怠けっぷりですね」

「あの大佐、査問会にかけられる覚悟あってやっています？」

リコリスの投げた封筒は狙い違わずアルバート王子の頭に着弾し、リコリスは痛がる猶予も与えず書類の処理と彼女が持ってきた書類を読むことを言い渡した。そしてアルバートの後ろで力なく笑う、相棒兼副官をキッと睨みつけた。

「……クロード・ストラトス大尉、あなたは頭は悪くないと思ってたのに」

「おい、クロードは頭いいぞ結構」

「馬鹿の味方するのは馬鹿だけなんですよ殿下」

件のクロードは付き合ってもらえないというように目線をあらぬ方向に向けた。付き合ってもらえないのはこっちだ、とリコリスも大きな溜息について執務机の前に立つと、アルバートも目線をそらし

た。

この二人はリコリスが怒ると昔からこうなるのだ。態度がどう
こう怒鳴るのも数年前に飽きた。

「一国の王子にそんな態度とるかよフツ」

「仕事もしない王子に払う敬意なんて微塵ありません」

「で、コレ全部読むの？」

「当然。私昨日徹夜でまとめたんです。会議用でしょう、あな
たのせいでまとめ損なんて御免です。もう一度言います。徹夜
したんですよ私」

明るい茶髪をくしゃくしゃにして頭をかくアルバート。

リコリスは執務机から水色の紐で束ねられた紙を引っ張り出し、
漆黒の髪を翻して来客用テーブルに向かう。所在なさそうにして
いたクロードも、後から付いてくる。

「お、やってくれんのか」

「軍部から回したのだけです。政治関係の面倒な方は殿下にお
任せします。クロード、あなたも手伝って」

書類の束の中からいくつか選別したものを押し付けて、彼を見上げ
るとあからさまに嫌そうな顔があった。いい加減頭脳労働にも慣
れろ、という意味を込めて更に書類を押し付ける。

（「……マジですか」「がんばれ大尉」「殿下は黙っててください」
）

「で、殿下。まさか書類仕事手伝わせるために私達を呼んだので
はないでしょう？」

皺一つない書類をめくりながら言ってやると、アルバートが向こ
うの机でまた頭を掻いた気配がした。

「ながら作業的に聞くような話じゃないんだがな」

「クロードは別として、私は多重作業マルチタスクがあるから大丈夫ですよ」

多重作業——魔術師の上級技術、多重詠唱のための技術。同時に

複数の作業を行うこと。詠唱をしながら防御や物理攻撃を行うことが出来るほか、普段の生活においてもこうして書類仕事をしながら会話、もしくは同時に二つの書類を片付けることができるので、リコリスはこの技術を重宝している。

アルバートがふうっと吐息を吐いて、重く。

「……外交問題のこと、と聞いてもか」

部屋の空気が凍った。さすがのリコリスも手を止めた。隣で身を硬くしたクロードが、搾り出すように「……アル、」と。手で制しかけたリコリスはアルバートの声で思いとどまった。

「いい、今は非公式に会ってるからな。昔のままでいい」

そういうアルバートの赤銅色の目は、珍しく真剣そのもの。リコリスは呆れたような目を向ける。ここで話すということは軍部で把握している以外の問題があるのか、と。

「報告は大体聞いている。和平交渉が上手くないってないそうね？」

？ ふたつの見方

「このところの国境付近での小競り合いだが、昨日の時点で十件を越えた」

「……十件」

思わず復唱するクロードに、アルバートがしっかりと頷いた。

横からリコリスが、茶のみ話でもするような気軽さで話す。彼女がこういう風に話すときは、何かを熟考しているときと知っている。彼等は気にも留めない。

「まああまり仲がいいとは言えなかったけれど、いきなりよね。

それほど向こうの——サラマンカと小競り合いになるような理由はないはずだけど。——あるとすれば」

「教会への関心度の違い、か」

リコリスの言葉をクロードが引き継いだ。リコリスはそうね、と肩をすくめて続きを促す。

「我が国はティターニアの弟子が建国したからな。教会とは縁を切っても切れない仲だが、向こうさんは違う。信心深さではむしろこっちのほうが異常だろうな」

「まあ、それも貴族階級以下で、という話だけれど」

この国にはティターニアについて、不思議なことに二つの意見の相違がある。

一つは教会が広める『聖女ティターニアの伝説』。

もう一つは主に現実主義の魔術師達が広める『天才魔術師ティターニア』。

高給取りの魔術師達は貴族と接することが多く、後者に感化され

る貴族が多い。逆に庶民達は魔術師達に会うことはなく、前者である教会の教えに染まりやすい。

「で、やっぱり最初の騒動の原因が、宗教観の違いか？」

「ああ。まさかのそれだ」

アルバートがにべもなく言うので、リコリスは「頭痛が痛い」を素で言いそうな顔をして黙った。クロードに到ってはもう目が死んでいる。相棒の言いたいことを察した、というか自分も言いたいのだが、リコリスは聞く。もうこの馬鹿王子のことだから、この話を切り出した時点で決定事項なのだろうけど。

「アル、まさか」

「ああ。まさかのそれだ」

アルバートはわざとらしく、さっきと同じ言葉で返す。はあ、と華奢な肩がガックリ落ちる。ふと隣を見ると、クロードがさっき渡した書類を見つめていた。現実逃避か。

もうどうでもいい、どっちみち仕事は回ってきただろう。そう投げやりに考えたリコリスは

「続きをどうぞ、第二王子殿下」

と僅かな反抗として嫌味を言って、殿下の命令に「是」と答えた。

「最初の騒動の原因はサマランカの兵が神子について、というかお前について軽口叩いたからだ」

リコリスは「神子」と復唱して、自らの黒髪に触れた。その向こうでアルバートが、隣にいるクロードさえもが目をそらしたのは、恐らく気のせいではない。

「神子は神の愛し子。 神子はティターニアの御子。 その証はこの世のものではない、濡れた黒髪に黒曜石の瞳。 ……だっけ、クロード」

「何故オレに振る」

「だってこんな面倒なこと覚えてるのクロードくらいしかないじゃない」

「お前もしっかり覚えてるだろ」

さあ、とでも言うように肩をすくめたりコリス。 クロードは続けてくれ、と呟く。

信心深いティターニアの国民はティターニアと縁があるといわれた『神子』に、崇拜にも似た尊敬を抱いている。 逆にサマランカ、というよりはティターニア以外の国は『神子』をそれほど崇拜していない。 ただ、「有益となる可能性が高い人物」と見ているだけだ。

要するに、この意見の相違が今回の騒動の原因。

「まあ、原因はこんなもんだ。 で、ここからが本題だ。 騒動の前は、大体何かにつけて騒ぎがある。 泥棒とかな」

「泥棒？ まあ、騒ぎに乗じてなら分かるけど、騒ぎの前に？」

解せない、とリコリスの漆黒の瞳が不思議な光を放ち、調子を取り戻したクロードの青い瞳がアルバートに注がれる。 アルバートはその中、珍しく一瞬言いよどんで、言った。

「そいつの目撃談だが――黒髪の間人、だったそうだ」

？ 損して恩借れ

「おえー……」

「耐えろ。あと三時間で着くから！」

「……三時間、舐めてるの？ 私がそんなに我慢できるとでも……」
「まさかの開き直り！？」

グラグラ、ボタンゴトン。リコリスがこの馬車という不快な乗り物を表すならこの擬音語に限る。大体、あの馬鹿王子共がこんなばっくれるような任命の仕方をしなければ、もう少しマシな馬車に乗ることができたのだ。

神子として、魔術師として以上に王子達からの信頼が厚いリコリスがこの調査任務のあと、この後ティターニアから持ちかける予定の和平交渉に噛むことになるのは必至。そうなれば貴族から猛反発を喰らっただろう。それを見越した、あの猫かぶりの、腹黒第一王子がどうか貴族の言質を取ったらしく、その隙を突いてのアルバートからの任命。その翌日、まるで夜逃げのように軍部から逃げ出した。

馬車はたった二人の調査官が乗っている、というのにも少々貧相な馬車。

（ダメ、吐く……）

左官以上の外出任務用の、少々変わった形状のタバードを左手で握り締める。腰に差した細剣が馬車の壁にガチャリと音を立ててぶつかる。隣であたふたしているクロードを横目に、どうにかして気を紛らわせるべく窓の外へ視線をやる。その時、前方に横倒しになった荷馬車を見つけた。

「クロードッ！」

恐らくは商人の馬車だろうそれには、数人の武器を手にした男が群がっていた。間違はなくそいつらが賊だ。リコリスは酔いも忘れてクロードの襟首を引っつかむ。突然の鋭い叫びと行為に驚いたクロードは「うおっ!？」と驚きながらも、リコリスが目線をやる先を見て、表情を引き締めた。

その瞬間、馬車が急に止まる。その反動でクロードもろともリコリスは壁に背をぶつけた。しかしリコリスもクロードも声を立てることはなく、即座に体勢を整えた。クロードは腰に下げた得物に、リコリスは細剣の位置を確かめるだけして、魔術をいつでも発動させるべく、意識を集中させて。

外から僅かに声が聞こえる。御者の男と、そうではない数人の男の声。

（もう見つかったか。……距離的にあの馬車が引き連れていた護衛とでも思われたか）

だとしても普通は同乗するものじゃないかしら、と僅かな疑問を抱きながらリコリスはゆっくりと立ち上がる。クロードは馬車のドアの鍵を開けた状態で扉を押さえ、合図があったらいつでも開けられるようにする。

そして、剣が鞘を走る音がして。

「おい、出て来い！」

「出てあげるわよっ！」

リコリスの挑戦的な怒号が合図となり、クロードはドアから手を離す。その瞬間、巨大な炎弾がドアを押し開け、その前にいた男諸共吹っ飛ばす。クロードは敵が怯んだ瞬間を見逃さず、腰の得物を引き抜いた。まるで舞うような動きで、そばにいた数人の男

の急所を的確におさえ、気絶させていく。

その隙にリコリスは御者を守るような位置に立ち、指先から炎弾を撃つ。

「ありがとうございます」

さすがというべきか、御者に扮した兵はすぐに金具をはずして馬ごと駆けていく。混乱が収まったら合流する。リコリスはその謝辞に頷くだけで答え、クロードを狙っていたほかの男の足を撃った。

（それにしても、人数多くない？）

どう見たって先の馬車を襲っていた人数より多い。向こうは多くて四人、こちらは十人程度か。

（……ん？）

そういえば、さっきの光景から思い出したことがある。いるべき人間がいないのだ。リコリスは冷静に諦め悪くも立ち上がろうとする男を撃って、頭の隅でもうひとつのことを構築、実行しようとして――。

「リコリスッ！」

「！」

背後から剣が鞘を走る音がした。リコリスは反射的に身体をそらし、細剣をベルトから鞘ごと引き抜いた。ガン、と腕に強い衝撃が走る。ひげ面の男が振り下ろした剣をリコリスの細剣がかろうじて受け止めていた。かといってリコリスの細腕で耐え切れるわけもなく、腕は情けなくも震えていた。

「黒髪……神子様か。これは高く売れる」

「この国の人間じゃないのね。でも軽口叩いてる場合？」

舐めまわすような視線と口調にもリコリスは挑戦的に答え、男が何を、とにやつく。その時、

(……できた)

頭の隅で、カチリとパズルのピースがかみあったような感覚がする。

「多重詠唱、構築完了。――第一、撃て」

男の後頭部で、空気が圧縮して爆ぜた。意識を飛ばし、倒れこんでくる男を避ける。すべて片付けたらしいクロードに笑いかける。クロードの右手の剣尖には年若い、恐らく一番下っ端である男が一人。

「第二、フィールド魔術《焰の檻》」

別に言葉に出す必要はなかったのだが、唯一意識がある男に脅しをかけるべく声に出してわざと言う。

これが多重詠唱――リコリスが得意とする技術。リコリスはこちらで戦いつつ、向こうの荷馬車に魔術を仕掛けていた。

言葉を紡いだ瞬間、リコリスの遙か後ろ――先の馬車のある辺りが燃え盛っていた。もちろん、馬車はとくに違う場所に退避していた。

「商人根性って呆れるわよね」

腕を組み、言葉通りの呆れ顔で言ったのはリコリスだ。向かいに立つクロードの隣には、ぐるぐる巻きに縛られた、真っ青な顔の賊の一人だ。他の男達は目を回したまま動かない。賊の青年はさっきから冷や汗を流すばかりで口も利いていない。というより、利けないのだろうか。少々怯えさせすぎたかな、と思って笑いかけてみるが、賊の青年は更に真っ青になっただけだった。

(「リコリス、今は逆効果だよ」「何がなのよ」「……気付いてないならいーよ」)

馬蹄の音がしてそちらに目をやると荷馬車と、逃がした御者がいた。御者台にはほくほく顔の中年男性が一人。彼はこちらに気付いたのか、笑顔のまま大きく手を振った。

？ 損して恩借れ（後書き）

初の戦闘描写です。 やっぱり戦闘って難しい…

？ 天然な商人

商人というものはある意味、軍人や傭兵なんかよりも恐ろしい存在だったりする。彼らは羽ペンと証文を武器に、戦わずして利益を上げる。損得勘定をさせたら世の中のどの人間よりも早く、正確だ。まあそれができない人間は破産して行くのだが。

そうして今回リコリス達が助けた商人、ベイツもその一人だった。

「……やってくれましたね」

「商人の武器はなにも羽ペンと証文だけではありませんので」

リコリスの恨めしげな声もさりと受け流すあたり、この初老の男もよくできている。

ベイツはリコリスを見つけた瞬間こそ驚いたものの、すぐに商談用の笑みを貼り付けて自己紹介と感謝の意を伝えた。

商人にいい思い出がないリコリスとしてはいい迷惑だが、事情聴取はしなければならない。

そこでリコリスは先程の推測を話した。

あなたはもしかして、あの賊に自分はただの使用人であり、主人は後続の馬車に乗っていると嘘をついたのではないかと。

「あなたはこの馬車に軍人が乗っていると気づいていましたね？」

この馬車は低級で、辻馬車に小さな国章をくつつけただけ。低予算化のための安普請は思わぬ功を成した。即ち隠密行動においてである。

今回の移動にこの馬車を選んだのも、『ばっくれ』の為だったり

する。

まあそんな余談はさておき、この馬車の事はその筋の人間にはすでに有名だ。そして情報を糧とする商人達もある程度は知っている。

つまり。

「すみません……押し付けるようで」

字面とは裏腹に悪びれる様子もなく言うベイツ。

（商人って………！）

怒りやらでぶるぶる震えているリコリスの代わりにクロードは「いえ、これも仕事ですから」と言ってくれた。

街の外での盗賊行為というのは連行しづらいという点から、原則捕まらない。変わりに襲われた場合には賊を殺しても構わない。だからこそ、自衛の手段として一般人は傭兵を雇う。ベイツもその例に漏れず、腕の立つ傭兵を一人雇っていたらしい。

「その傭兵の方は？」

「あの子とは、ここから西のレスコの街で別れてきました。次の街でまた別の方に頼んでいますので」

再び御者が馬車に馬を繋ぎ直し、車体に損傷がないか調べる間、リコリスはベイツに聞いた。

リコリスは一般人に向けるにしては多少鋭すぎる視線を送るが、当の本人は笑顔を崩さない。

「しかし助かりましたよ。まさか一つの街の間で襲われるとは」

油断なく聞いていたはずのリコリスは、思わず聞き返したくなかった。

（筋金入りの天然なの？ この男）

以下、リコリスの心中より。

「当たり前です！ この国境付近は治安の悪さで有名じゃないですか！」

「でも、まさか自分が襲われるとは」

「あんな荷物満載の車、襲われるに決まってるだろ！」

天然な返答に、思わず横から眺めていたクロードも、敬語を忘れて参戦。

若い軍人二名のツツコミの嵐に、思わず気圧されたのか数歩後ろに下がって、今度は申し訳なさそうに「すみません」と言った。

？ 可愛いものなら何でも愛す

ティターニアとサマランカとの国境近くの街、アーガイル。

この街に構えられた、ティターニア駐屯軍の基地前に少女が立っていた。

明るい蜂蜜色の長い髪に、翠色の大きな瞳。人形のような顔立ち。華奢な体格には似合わない左官の軍服を着ている。

街の人間と事情を知らない下級士官が怪訝に見て歩き去る中、彼女は蜂蜜色の髪を弄りながら見つめていた。

まるで点検でもするかのように。

そんな彼女の後ろから、

「お姉様っ！」

と、その手はタバードの下で交差される。ピンク色にきつく脱色した髪が目立つ彼女はつり目がちの目をニヤニヤさせて少女に抱きついた。

一瞬、基地前の空気が固まる。

『お姉様』がいきなりの接触に固まっていることをいいことに、ピンク色の髪の少女は頬擦りしながら「お姉様相変わらずちっちゃくてかわいい」と言い、タバードの下で腕をもぞもぞさせて一言。

「あら、胸も相変わらず」

その瞬間。色が抜け落ちるように『お姉様』の髪と瞳がさっと黒く変わる。否、少女はもともと黒髪だった。ただそう見えなかっただけで。

黒髪黒目は神子の証。

その場にいた全員が、いきなりの神子の登場にどよめきそして神子に無礼を働いた者に対する冷たい視線。

まず最初に制裁を与えたのは足元に炎の魔法陣を構成させた、

「この……っ、変態がああああっ！！」

涙目で胸を押さえた神子本人だった。

「馬鹿、馬鹿ッ！ この変態！ いきなり何すんのよ！」

任務に支障ない程度の、ありとあらゆる制裁を加えた『お姉様』

――改め、リコリス・インカルナタは未だに涙目、両手で胸を隠すようにして叫んだ。

泣きわめくりコリスを必死になだめすかし、変態もろとも基地に連行したクロードもため息を吐く。

「エレア、リコリスがこういう過剰な接触苦手だって知ってるだろ」

「それ以前にセクハラじゃない！ 大体あなた、私より三つも年上でしょ」

「セクハラだなんて、私はお姉様との再会を喜ぶ気持ちを」 「だからってアレはないでしょアレは！」

変態の視線から逃れるようにクロードの陰に隠れたリコリスが非難の声を上げる。

クロードと背中合わせに立つと、棚の上になかなか良い時計を見つけた。 急をお願いしたにも関わらず、最高級の応接室を空けてくれたらしい。

ピンク色の髪の少女、エレアノール・スコット少尉。魔術師の多くの例に漏れず、「可愛いものなら何でも愛する」という筋金入りの変人。

魔術師の能力としてはリコリスに遠く及ばないものの、かなりの有望株だ。士官学校を卒業してすぐリコリスと同じ「エリート」として名高い第三師団に配属されたものの、そのあまりの変人っぷり——要するに可愛いもの、リコリスへの異常な執着——が災いして、現在の第二師団アーガイル駐屯軍に左遷された。

「まったくだ。大体、あんたところで騒ぎを起こして——」
「でも、良い宣伝にはなったでしょう？」

自信に溢れた声。クロードの陰から少しだけ出ると、そこにはしたたかに微笑む少女が居た。

リコリスと同じ、ただしタバード無しのデザインの軍服のポケットから書状をひらひらさせる。二の句を告げないクロード。

確かに彼女の手にある書状の中身、つまりアルバートからの具体的な命令は『リコリスを使って炙り出せ』。リコリスにとって大いに不満なやり方だが、宣伝効果はばっちりだ。やり方に問題はあったにせよ、彼女は任務の第一段階をクリアした。

もちろんリコリスの幻術にも一応の作戦があったのだが、そちらはリコリスの私的な理由もあり、結果的には彼女の取った方法が正しいのかもしれない。

「……っ、だからといって、うやむやにする気なんてさらさらないわ！」

「あ、バレました？」

やっちゃった、と言わんばかりにペロツと舌を出してみせるエレア。

「お姉様がこれ以上無駄に魔術を使って、消耗させないようと思ったのですが」

「何それ嫌味？」

リコリスが秀麗な眉を顰めて、陰悪に聞く。 エレアはまったく意に返す様子もなく。

「では行きましょうかお姉様、荷物持ちのクロード大尉。 このエレアノールスコットが、華麗に可愛くサポートさせていただきますわ！」

？ 可愛いものなら何でも愛す（後書き）

そろそろ設定等がわかりづらくなってきた頃かと。 質問、感想
批評等ありましたら気軽にどうぞ！

？ 隠れた存在

到着して三日目の夕方。聞き込み調査、現場検分等の調査はほとんど空振りに終わっていた。それはもう、虚しくなるくらいに。唯一出てくる情報は、犯人の容姿についてのこと。

「普通の男物の旅装束に……恐れ多いんですが、黒髪を見たような……」

最初に被害にあった宿の女将はそう言い辛そうに言って、リコリスの黒髪を見やる。疲れが出てきたらしい後ろのクロードがはあ、とため息を漏らし、その横のエレアがクロードの足を踏んだ気配がした。リコリスは大して何を思う風でもなく、謝罪の言葉を述べる。ふと、黒髪を見る目がいつものような尊敬の目ではないことに気付く。

「何か思うことでもおありですか？」

「いえ、その。黒髪には違いないんですけど、神子様の髪とは少し違うような」

不安げに返された回答に、リコリスは目の色を変えた。

「どういうことです？」

食いつくように言ったリコリスに、女将は少しのけぞって。

「なんというか、少し色合いが明るかったような」

リコリスの息を呑む音、その後沈黙。

橙色の明るい光が、リコリスの蒼白な顔を染め上げていた。

「……教会がつかんでない神子、か」

やっと出てきた新情報に、クロードは重たげにつぶやく。

隣を

早足で歩くりコリスがそうね、と相槌を打つ。

「もし黒の染料が出てきたとしても、それは今の私の色だしね」

黒の染料を使用した工作員による工作行為、という可能性をリコリス達は考えていた。染料を作るにしても経費はかかるわ、かぶれがひどいわで使えたものではないし、何より教会が規制している。それでも神子がリコリスの別にいる、という可能性よりはまだあった。

神子はこのティターニアでは崇拜され重宝され、そのほかの国では『有益な人物』とみなされている。かつての神子達は揃いもそろって国の命運を左右するような才能を持って生まれてきた。ある者は魔術、あるものは武術、あるものは政治の才において。リコリスについては言うまでもなく魔術の才。まあ、神子にも大きな欠点はあるのだが――。

そんな人物を国や組織が放っておく訳がない。中でもティターニア教会は神子を探すことに力を入れている。リコリスは教会に探し出され、育てられた一人だが、それはおいておくとして。

「……お姉様、お体は大丈夫ですか？」

思考で頭がいっぱいになっていたリコリスは、そうエレアが何度も言って揺すぶるまで気がつかなかった。ピンクの髪に覆われたエレアの顔を見上げると、彼女は心配そうに眉尻を下げている。

商業が盛んなアーガイルではすでに夜店が出始め、暖かなランプの光が藍色に沈んでいく街を照らしていた。リコリスはそんな町並みを横目に答える。

「大丈夫、これくらいなら」

「でもお姉様、到着してからろくにお休みになっていません。いくら神子のことだからって――」

「うるさい」

自分でも驚くくらいに冷たい声が出た。 エレアが健康的な肌色の腕が、そっとリコリスを放す。

「ごめんなさい。 でも大丈夫」

基地に戻ろう、とクロードが言いかけて、明かりに照らされない路地裏を注視する。

「何？」

「リンチか、恐喝か、どっちか」

そう言うのとクロードはエレアの横をすり抜けるようにして走り出す。 俊敏な動きはエレアが抗議の声を上げる間もなく路地裏に消えた。

「もう！」

エレアがポン、とフリルつきのスカートを軽く殴る頃にはリコリスも走り出していた。

「——お姉様ったら！」

？ 隠れた存在（後書き）

長くなってしまったのでいったんここで切ります。 明日の夕方までには更新できるとおもいますのでしばしお待ちを。

勝手にランキング、登録しました！

気に入っていただけたら一票お願いします♪

？ 女って怖い

暗がりの中で何をやっているかと思えば、数人の女が一人の男を取り囲んでいるところだった。男の方は暗くて顔が見えないが、女性が一人彼の襟首をつかんでいた。

「ちよっとこの女何なのよ！」 「アンタこそ何よ！」

揃って派手なドレスを着た女たちの、お決まりの争い文句に駆けつけたリコリスは額に手を当てた。

少し前に着いたクロードはこの女性達に逆に怒鳴られたらしく、たじたじの表情で隅に立っていた。

「……何やってんの」

「いや、女って怖えなー……ハハ」

でしょうねえ、と他人事のように（実際他人事なのだが）つぶやくと、リコリスの声が聞こえたのか、女性達は振り返る。まさに悪魔のような表情。

さすがのリコリスさえ、一瞬後ずさる。

ははあ、と一人の金髪の女性が言った。

「あなたって神子様までたらし込んでたのね……！」

（いや、どうしてそうなるのよ……）

本当に怒った女性の思考回路はわからない、とリコリスは大ききため息をついて冷静に答える。「自分も女だろうに」と小さくぼやく声が聞こえたが、それは無視することにする。

「私はティターニア王国軍第三師団所属、リコリス・インカルナタ

大佐です。 巡察中に見かけたものですからなにか困ったことでもあるのかと思ひまして」

金髪の女性は少し冷静になったのかふうん、と思案顔。 冷静になつてこの態度だから、おそらくこの国の人間ではないだろう。 態度ひとつで国がわかるって結構面白い、なんて思うリコリス。

「こいつ、私達のほかに三人もたらし込んだたのよ。 何かこいつを罰せる法律とかないの？」

「私の思う限りでは」

リコリスは肩をすくめて言う。 男の襟首をつかんでいた明るい茶髪の女性はふん、と鼻息も荒く放し、掴まれていた彼は尻餅をついた。

「行きましょ！ なんかもかつくから今夜は飲むわ！」

金髪の女性がそう宣言すると、彼女達はまるでさっきのいがみ合いが嘘のように私も！と賛同する。

はあ、とクロードが安堵の溜息をつき、リコリスは「大丈夫ですか？」と彼に手を差し伸べる。

「ありがとうございます。 お礼に今夜、俺と食事でも――」

聞き覚えがある声に秀麗な眉を顰める。 路地裏の暗がりから引っ張り出した彼の顔を、初めて見る事ができた。 逆にリコリスの顔が逆光で見えなかった彼も、リコリスの顔を見たらしい。

「あ」「あ」

非常に不本意ながら、思わず声が被る。 そう、彼は三日前、リコリスとクロードが叩きのめし、一人だけ意識があった盗賊の一人だった。

本当のところは捕まえようと思ったのだが、この街では彼は法に背くような行為はしていない。被害者である商人ベイツも被害届は出さないと言っていたので、捕まえたとして無駄だろう。

「……とりあえず、放免します」 と言って彼の腕を放したリコリスはなんだかものすごく疲れた顔をしていたという。

？ 女って怖い（後書き）

ダメだ……書きたいシーンがどんどん先延ばしになってゆく。
明日から新学期が始まるので更新ペースが落ちますが、これからも
よろしくお願いしますm（
）m

？ 林檎のほっぺ

「お姉様！ 今日では流行の料理店でお食事しませんこと！？」

エレアがあんまり楽しそうに誘ってくるので、リコリスは思わず是と答えた。必然的にクロードも付いてくるわけで。料理店というのは、大体キツイ酒を客に勧めてくるわけで。

泥酔していつもと比べても異常なくらい絡んでくるエレアと、わかりづらくはあるが陽気で気が大きくなっているクロードを適度に相手しつつ、リコリスは小さなグラタンをつついていた。

「お前も飲めよりコリス！」

「嫌。絶対飲まない」

「お姉様、お酒飲めないなんてまだお子様ですわねうふふ。：

…あーやっぱり可愛い」

「色々言いたいことあるけど、とりあえず絶・対、飲まない！」

リコリスは腹立たしげにグラタンを頬張った。お酒を飲んだらどうなるかわかっていて聞いてくるのが腹立たしい。

そんな様子に気付いたエレアはくすくす笑い出す。酔っ払いの相手は大変だ、と水を煽るとエレアは料理亭に入ってきた一団を見てげんなりした顔で言う。

「……ギルドの連中ですわ」

「ギルド？」

ギルドと言えば依頼を受けて護衛等を行う団体、としか認識していないリコリスはエレアがしかめ面した理由が分からず、首をかしげる。

隣にいたクロードが少し声を潜めて答える。

「依頼を完遂するような律儀な奴がいらないんだよ」

「……何それ」

クロードはとおきの内緒話をする子供のような笑顔を浮かべて、さらりと言う。

「俺も小さい頃にギルドに依頼したことがあったんだが、その時森のど真ん中に置いてかれた」

「ちよっと何そのギルド！ ただのぼったくりじゃない！」

ガタン。

立ち上がった勢いで椅子が倒れ、大きな音をたてる。叫び声と共に立ち上がったリコリスは当然注目を浴びた。その隣でエレアが「お姉様、ツツコミ所が違います」と頭を抱え、さらにそんな彼女に「いや、お前のツツコミどころも違うだろ」とクロードが言う。

「ちよっとお嬢さん、私達に何か文句あるの？」

ギルド連中の気が強そうな一人の女性が声をかけてくる。

金髪の、胸を大胆に露出した服を着た彼女はリコリスと真っ向から睨み合う位置で立ち止まる。身長が低いリコリスは見上げる形になってはいるが。

「今は別の話をしていたのだけれど。まさかあなた達も、やましいことがある訳じゃないでしょうね」

リコリスも返した言葉は挑発的だ。女性の方はぴくり、と眉を動かした。

（あー……これは）

（喧嘩の流れ、ですわね……）

既に外野と化した二人はこそそと話し合う。まさか見捨てるわけには行かないし、とか、これって私達も強制参加でしょうか、とか。

何だコイツら薄情だな、と微妙にビクビクしている料理亭の主人が見ていることにも気づかない。

「……へえ、いい度胸じゃない、チビジャリ」

「大きいだけで偉そうにしないでほしいわね」

まさに一発触発。

クロードが振り向けば、どういう流れでこうなったのか、互いに互いの体の一点を見つめていた。クロードはタバードに覆われたソレを見て——まあ、服のせいで更にそう見えるな、と頷き、リコリスの林檎のように赤くなった頬を見て、数分前までの自分をぶん殴りたくなった。

そういえば、リコリス・インカルナタは下戸だった。

それも匂いを嗅いだ程度で酔ってしまうほどの。

？ 林檎のほっぺ（後書き）

更新遅くなってすみませんでしたあああああっ！！
やっぱり新学期は大変、です……。

ところでアンケートなのですが、私は読みやすさと書きやすさの為に一話あたり一千文字前後でまとめるようにしています。

読者の皆さんは、この程度の分量で読みやすいでしょうか？

アンケート結果によっては改善したいと思いますので、よろしければお答えお願いします。

？　ようやく掴めた、標的

「あー私、昨日何してたっけ？」

「あれだけ暴れて人に苦勞させた翌朝の台詞がそれか」

何時になっても起きてこない上官兼幼なじみを部屋まで起こしに行く、この手のかかるお嬢様は何にも覚えていない様子だった。

国境の街、商業の街の情緒を楽しませるための窓は一度も開けた形跡もなく、カーテンだけ動いた形跡がある。いかにも高級そうなティーカップが並べられたシンクに至っては使った様子すらない。

この様子じゃ執務室に引きこもってたか。

一日中仕事していたと言えば聞こえはいいが、こいつは長期戦を考えないのかとやや呆れつつ、リコリスを横目でみる。

「えーと、私なんかした？」

見られた方はイタズラが見つかった子供のような顔をする。

狙いすました訳ではないのに絶妙な角度で首を傾げる幼なじみ。

そんな彼女にクロード・ストラトスは――

「何す、――あだっ!？」

思いつきり頼まれていた書類をぶん投げた。

クロードは「それ昨日お前が頼んだ調書だから」と言ってテーブルのお茶菓子をぼりぼりかじり出すので、

「こぼさないでよ」

「子供かオレは」

今日のクロードは随分機嫌が悪い。よっぽど酔って暴れたのか、でもそんなに怒ることか？と思いつながらもページを捲る。

そんな会話を経て数分。

リコリスは大層つまらなそうな顔をして聞く。

「で、続きは？」

「ちゃんと頭が働いてて良かった」

「つまらないお遊びはやめて。思いつきり途切れてるし」

今度はちゃんと持ってきたようで安心する。

いつもより碎けて接するクロードに少し違和感を抱きつつも調書を読んで、読んで。

「あー………」

思わず呻いた。

「あのタヌキ！」

このタヌキというのはもちろんリコリス達をここに送り込んだ王子のことで、ここが執務室でなければ不敬罪で罰せられてもおかしくはないのだが。

「あのタヌキ、感づいてたわね！」

リコリスが机に叩きつけたのは『パレナ商会取り引き商品の内訳』――。

表題自体は特に変わったところのないが、第三師団の大佐であり、その補佐官の大尉は見逃さなかった。

情報部から上がった最新の隠語と不自然な金額。

そう、パレナ商会では、違法な奴隷取り引きが行われている。

そして——黒髪を目撃情報。

「昨日のことも含めて確認しようか？」

思わずついた溜め息にクロードが提案する。

今日は彼に世話になりっぱなしだ。起きてから数十分も経っていないのに、だ。

今回の任務、「戦争回避及び停戦協定」。

激化の一途をたどるティターニア、サマランカ間の戦い。厄介なのがこの戦いの原因が宗教にあり、発端は軍人同士であったが、現在戦っているほとんどは一般人であること。

神子、事実上リコリス・インカルナタを侮辱された、と怒るティターニア国民。対するサマランカ。

サマランカはもともとティターニアほど神子を神聖視していなかった。が、サマランカ国民がティターニア国民の前で神子を侮辱のには訳がある。

最近頻発している窃盗事件。

犯人を目撃情報は「黒髪」。

黒髪の人間は神子——その目撃情報は、現在世界でたった一人しかいない神子、リコリス・インカルナタを指す。

当然、ほとんど毎日軍部に出ているリコリスは無実なのだが。

今はまだ、サマランカ側は「噂が拡大した末の小競り合い」くらいの見解しか示していないが、このままこの戦いが続けば、本格的な戦争もあり得る。

ティターニア教の総本山たるわが国としてはどうしてもリコリスの無罪を証明したいだとか、新たな神子を手に入れたという様な思惑もあって腹黒王子約二名から送り込まれたのがこの二人。

第三師団副師団長であり、問題の黒髪の神子、リコリス・インカルナタ大佐。

叩き上げのエリート、と目される第三師団所属、クロード・ストラトス大尉。

「で、どういう訳か酒場で酔って暴れてギルドの女と喧嘩して、店主に泣き疲れるわ女の連れに恫喝されかけるわで手に入れたタレコミから手に入れた情報がこれ」

クロードが呆れ顔でいう。ビスケットの食べかすがこぼれまくっているのは置いておくとして（後できちんと掃除までさせておこう、食べながらしゃべるからだ）、リコリスは調書の文字を目で追って答える。

「目撃情報をまとめると、黒髪が最低二回は出入りしているパレナ商会。

そのパレナ商会を洗って、出てきたのが奴隷取引の疑い、か」

黒髪の詳しい容姿も報告されており、体格や肌の色からしてティターニア出身の者だと予想できる。

これは由々しき事態だ。

黒髪が奴隷取引に関係しているかどうか、はこの際関係ない。

問題は周りからどう見られるかが問題になる。

ただでさえ、小競り合いの原因になっている黒髪。その黒髪が奴隷取引に関わっているととなると、サマランカに与える印象は最悪。

パレナ商会の”商品”の出身によつては諸外国だけでなく、ティターニアの貴族達ですら、敵に回るかもしれない。

リコリスは小さく息をついた。

溜め息ではない。ついさっきまでのだるさを抜くため。目を
つむったのは考えをまとめるためだ。

執務室を支配する静けさの中に、小さな衣擦れの音。

たつぷり十秒はそうしたあと、目を開けるとクロードが少しそわそわして、それでもいたずらっぽい笑みは忘れずに言った。

「して、御命令は？」

リコリスは笑って答えた。

「リコリス・インカルナタ大佐より命令。パレナ商会の奴隷取引の調査開始と共に、家宅搜索の準備を。特に黒髪と商会との関係を洗いなさい」

「証拠が揃い次第――家宅搜索、及び商会主と黒髪の捕縛を行います。準備を」

「了解」

クロードが水を得た魚のように生き生きして部屋を出て行く。

そういえば武闘派だったな、などと思いながら執務室の窓を初めて解き放った。

ガラス越しとは桁違いの光量と、音の洪水。

商業の街というだけでなく、妙に歓楽的なその声その声を聞いて。

リコリス・インカルナタはようやく、充実した仕事ができる、と

思
っ
た
の
だ
っ
た
。

？ ようやく掴めた、標的（後書き）

更新3ヶ月振りになってしまいました……お久しぶりです！

？ 心配事―エレアノールの場合

魔術師という職業が高尚だとされているのは、聖女ティターニアが魔術師だったから、というだけではない。

魔力を用い、この世の法則をほんの少しねじ曲げるアルトリア式魔術。

魔力による精霊との契約書、一般的には魔法陣を用いて精霊の力を具現化させる、ルーテシア式魔術。

どちらを扱うにしても複雑な演算、ほとんど才能に頼る優れた直感が必要になる。

故に魔術師というのは魔術以外の面でも大いに活躍できる。

――例えば、エレアノール・スコットの場合。

「トニー二等兵、先週違法取引の商人がいましたよね」

「はい、確知行商人の」

「そいつを張ってきてくださる？ 余罪がありますの」

「……いえしかし、自分には任務が」

「そろそろ得点が貯まるのではなくて二等兵？ そろそろソイルの街へ一等兵の推薦を書かなければならないのだけれど。 治安もいいしソイルの街は子供にはよい環境ですし」

「……ハッ！ スコット少尉、行かせていただきます！」

小走りで駆けていくトニー二等兵を（表面上は）にこやかに見送るピンクの髪の少女、通称エレア。

魔術師の中でも特に目立つ変人っぷりで、同時に才能もある魔術師。 エレアが得意とするのは情報収集。

証文泥棒を片っ端から捕らえパレナ商会の内部情報を手に入れ、出入りしている商人たちと商品については乞食たちに聞き、それからその出入りの商人を尋問する。

魔術の特性を覚えるように個人個人の立場や性質を探り、魔法陣を描くように無駄なく目当ての情報への筋道を立てる。

エレアを頭脳派だとするならリコリスはどちらかといえば芸術派で、このことに関しては若干劣る。

「すごいわねーエレア。いつの間にここまで進化したのね」
一通りの報告を聞いたリコリスは、いつもよりは少し起伏にける声で部下の功績を誉める。

リコリスは長い黒髪を一つにまとめていた。スカートのプリーツは崩れ、軍服の皺が目立つ。

執務室の中は数日前、奴隷取引に気付いた頃よりはだいぶ散らかっている。書類は床にぶちまけてあり、本来休むべき場所であるソファには商人の情報が記された報告書の山。床の書類はどうやら用済みらしく部屋の主は遠慮なく踏み歩いている。

律儀に書類を避けて歩こうとするエレアを尻目に、リコリスは備え付けのシンクに向かう。

「何飲む？　ちょうどファーストフラッシュのダージリンあるけど」
「いただきますわ。ストレートで」

「適当なところに座って待ってて。ソファの左二列の書類は床に落として構わないから」

数秒の間の後、聞こえてきたのは書類を落とす音ではなく移動させる音。近くの机に移動させたのだろう。やっぱり律儀だ。お湯を沸かし始めると机に戻り、報告を促す。部屋の空気が途端に緊張を帯びたものになる。

「パレナ商会在奴隷取引を行っているのは間違いないと思います」

エレアはリコリスの行動を正しく理解し、報告する。

「表向きは輸入雑貨。サマランカ、ティターニア間だけでなく諸外国とも取引を行っています。その出先で“商品”を買い付けているものかと。ですが最近の規制強化に伴い、自ら他国から買い付けるのではなく、国内の小口の奴隷商人達と取引を行っていると考えられます」

手元の書類を見ることがなく読み上げるエレア。どこことなく疲れた表情のリコリスは腕をくんで背もたれに寄りかかる。

「要するに、この近辺の奴隷商人の元締めのような存在になりつつある、と言うことね」

「そうなります」

エレアは頷き、続ける。

「次に黒髪についてですが――」

とその時ピーッと甲高い音が響く。

「煎れてくるから少し待ってて」

トリコリスは苦々しく笑ってシンクへ向かう。

エレアはもうお姉様ったら、とぶつぶつぶやいてリコリスを待つ。

「で、黒髪は？」

戻ってきたリコリスはソーサーごとエレアに渡し、自分は執務机に戻る。

「黒髪は商会外部にある、奴隷の隠し場所に向かっているそうです。今度大口の注文が入り、副商会主がそこで取引するので、護衛に」
「どうりで私の網に掛からないわけだわ」

リコリスはまた苦く笑って、砂糖を入れる。

「ええ。ですがおかげで何人も——ってお姉様！」

エレアの大声。リコリスの小さな肩がびくつと跳ねて、そのせいでティースプーンを落とす。

「何杯砂糖を入れる気ですの！」

リコリスはその声になんのことか、と首のかしげて、ティーカープの底を見る。

「……あ」

白磁のカップの底に厚く積もる砂糖。

「お姉様、今いくつの術式を発動させてるんですの」

エレアはフリル付きに改造された軍服とピンクの髪を大きく揺らして非難がましく聞く。

「……探査三つ、識別追尾ひとつ」

対してリコリスはいたずらが見つかった子供のように、小さな声で。

「全部で四つも！ 前々から思っていましたけどお姉様、無理はなさらないで。いくら才能がおありだからって人間には限界というものがありますのよ」

眉尻を下げて言うエレアにリコリスは小さく笑う。

「今回の報告のおかげで二つはもう監視しなくても大丈夫そうだし、心配ないわ。 ごめんなさい」

わかったならいいです、とエレアは溜息をついて言う。 書類の山の一番上に報告書を置き、紅茶を一気飲み。

「行儀悪いわよ、エレア」

「部屋をこれだけ散らかすお姉様には言われたくないです。 ああ、そういうばインカルナタ伯爵からはとが届いたそうですよ」
げ、とりコリスは表情を変える。

「そういえば手紙、書くの忘れてたわ。 ……お父様、また何をしでかすか」

お姉様は人を心配させすぎです、とエレアは大人気なく言い残して執務室を出る。

ドアを閉める一瞬だけ垣間見えた表情。

（絶っっ対、面白がってるわ）

悔しいような、そんな複雑な感情がして、いやでも自業自得だげど頭の隅っこのほうで声がする。

なんとなくエレアと同じように一気飲みしたくなって、飲む。

「……………甘っ」

つくづく最近、思うのは。

（知り合いに対しての自分は、「神子」ではなく、随分と残念な子
よね……）

？ 心配事―エレアノールの場合（後書き）

最近、自分の中でもリコリスのヘタレ度が上がっている気がします。

作者本人がヘタレだからなんだろうなあ。たぶん。

…………リコリス、ゴメン。

?? 心配症——親バカの場合

証拠は揃い、パレナ商会の家宅搜索の令状はとった。後はその作戦を立てるのみとなり、陣頭指揮を取るようになるリコリス達は彼女の執務にいた。

「奴隷の隠し場所が問題よね。 国境の森の中となると、迂闊に調査すら出せない」

「国境うっかり越えちまうだろうし、何も知らないサマランカに挑発だと思われるかもしれないし」

「サマランカの有力者の後ろ盾でも取れば楽ですのに」

「それが出来たらそもそも戦争自体起きるわけもないわよ」

寝不足による不機嫌さを持って答えるリコリスに、クロードが返す。

「ミリアがいるだろ、あのコルロッテ家の。 リコリスとなら仲良いいし」

インカルナタ伯爵家の養女でもあるリコリスはパーティーであった一騒動をきっかけにしてミリアと交流があり、ティターニア軍人として出席していたクロードとも面識がある。

そんなクロードをリコリスはジト目で見て、

「……あのね、貴族には立場ってものがあるの。 このご時世にティターニアの軍人の肩を持てると思う？」

大体仲良いのは私じゃないし、とボソツと呟く。
その陰悪な声に悪い、とクロードは小さく言う。 「バカ」とり
コリス。

「もしその黒髪が本当に神子だったら正面から戦いたくないわね。
不意打ち出来れば勝機は十ぶ」

「た、大佐！ なんとかしてください！」

リコリスの言葉を遮ったのは息を切らした兵。 その顔に朝だとい
うのにある疲労を見受けたクロードは即座に察する。

苦労人ならではの勘だ。 非常に不本意だが。

「……ああ」

同時に悟ったリコリスは少し機嫌を直して聞く。

「インカルナタ伯爵？」

「はっ、はい！ リコリス大佐、ストラトス大尉、スコット少尉と
の面会をご希望です！」

面識がないエレアが目を輝かせた。

（……………恐ろしいことになるぞ、これは）

クロードは視線を泳がせた。

「リコリス！ お前と言う子は本当に何も相談してくれないし、殿
下の仰ることはよくきくし、相変わらず可愛いし、私達は本当に困
ったり喜んだり！」

「いい加減ちゃんとした文章で話して下さいお父様！」

「やっぱりお姉様は可愛いですわよね伯爵！」

「リコリスもだが、お嬢さんとても可愛い！」

「まあそんな！ 可愛いものマニアの私のこの格好を理解できる方が誰もいらっしやなくて——」

クロードの予想通りになった。

グレル・インカルナタ伯爵。優秀な魔術師を数多く輩出し、自身も魔術師である名家の現当主。リコリスが還俗を望んだ際、全力で根回しをし、養子縁組を申し出たのも彼だ。

優秀な政治家でもある彼には、一つ問題がある。

未だ肩を掴んだまま離さないグレル。リコリスは救いを求めようとクロードを見て、

（あの役立たず！）

彼の目が死んでいることに気づいた。某王子とか某変人魔術師とか、その他不審者たちに対する彼の反応はいつも同じ。

「まああれだ。いいじゃないか、極度の親バカでも」

「一人でも大変なのに、そんな変人が二人だと無理よ！ 助けなさいよバカ——ッ！！」

手紙も寄越さず急に本部からいなくなったりリコリスを心配してきたインカルナタ伯爵。

「お仕事は？」

「うむ。放り出してきた」

「お母様に叱られますよ」

「う……言うな」

極度の親バカをどうにか宥め、事情を説明するのに（途中伯爵とエレアが脱線し盛り上がったせいで）、予想以上に時間がかかり、彼が屋敷に戻るのを了承したのは太陽がすでに高く――というか、すでに低くなり始めた頃だった。

「ではお父様」

「うむ。今度は絶対に手紙を出すんだぞ」

「ええ」

手を強く握り締めたままブンブン降る伯爵にリコリスは笑って頷いた。

親バカ過ぎるのも考え物だが、こうして心配したり、愛情を注いでくれる親がいるのは嬉しい。

不意に教会にいた頃のあの冷たさを思い出して寒気が走る。

肌に触れる冷たい大理石、無機質な白い衣装、潮っぽい涙の味――。

その時、鳥肌がたった右腕にエレアがしがみついた。

「お姉様は責任持って私がお守りします！」

「心強いなエレアノール嬢。あなたとはまた改めて話したい」

「私もですわ。その時は美味しいお菓子をお持ちしましょう」

出口までお送りします、とクロードが申し出て私も、と言いかけたリコリスにクロードが目線で制した。

――話があるんだ。

リコリスは一瞬虚を突かれたような顔をして、すぐに笑顔を取り戻して頷いた。

「お父様——また」

「ああ、リコリス・インカルナタ。お前の歩む道が勝利に彩られるように」

軍属になってから交わされる別れの挨拶。

リコリスはまた笑った。

それは特上の笑顔。

人形のように整い過ぎた顔に、凜とした強かさと少女らしい可憐さをたたえて。

まるで荒野に咲く花のように——綺麗に、笑った。

夜。

随分と暗くなった、商業の街。深夜の商売は申請がなければ許されていない為、商業地区の灯りは数えるほどしかない。

この灯りの中に兵を向かわせれば、いくつの違法行為が見つかるか。

リコリスは結露した窓ガラスに小さな身体を預けながら、ふとそんな無粋な、軍人としてはもったもな感想を抱いた。

執務室の中には手元が照らせる程度の小さなランプ一つだったが、部屋は満月も近い月明かりに満たされているため、不便さは感じなかった。

普通の貴族のお嬢様はこんな感想を持たないだろう、トリコリスは自嘲気味に笑う。

その時、控えめにドアが叩かれる。

「どうぞ」

「まだ起きてたのか」

入ってきたのは軍服のままのクロード。いつもはもう寝てるだろう、と言いながらなかなかこちらを見ようとしなない。

寝間着姿だとも思ってるのか、トリコリスは思いながらも答える。

「そっちこそ」

ようやくリコリスの方を見たクロードは、言葉を詰まらせた。

窓辺に立つ、軍服のままのリコリス。

青白い月光が彼女を包み込む。

少し首もとを緩め、露わになった首筋は白く滑らかで、小さな顎が絶妙な影を落とした。

まだ成熟しきっていない整いすぎた顔は月明かりのせいかな、笑っているのに感情というものを感じない。

全体的に淡い白と黒のコントラストの中、月の魔力で表情を消された漆黒の瞳がまっすぐクロードを見据えているのが印象的だった。

無機質な美しさ、神秘的なその姿にクロードは思った。

（人形なんてもんじゃない）

（精霊、みたいだ）

「どうしたの、人の顔をぼーっと見て」
とりコリスは一方踏み出して答える。

机の上に置かれた人工的な橙色の灯りのおかげで、リコリスの顔が人間味を取り戻した。

「あ、ああ。早く寝ろ、って言いに来たんだが」

「あなたこそ。明日は迅速さが命なんだから、ぐずぐずしないで」
リコリスはくすくすと笑って言う。

「絶対に守れって」

「当然、命令は遵守」

「違う、インカルナタ伯爵にだ」

リコリスが微かに眉を動かした。

クロードは机を挟んでリコリスの正面に立つ。

頭二つ分は違う二人の身長。

リコリスはこのまま見上げる形になるのがなんだか嫌で、椅子に座った。

「……お父様が？」

いつもはそんなこと言わないのに、とりコリスは考えを巡らせる。

「一応言っとくが、今までそんなこと言われたことないからな」
とクロード。

グレルも魔術師だ。

意味のないことは絶対に言わない。

魔術師のことをよく知るリコリスは一つの予想に思い至る。

(……はっ、まさか)

それでもリコリスは心の中で一蹴した。
魔術師は魔術師だ。

クロードはリコリスと同じことを考えなかったらしい。

「お前だって万能じゃない。最近のお前の様子を聞いて、伯爵は心配されてたぞ」

不意に大きな手が頭をくしゃくしゃと撫でた。

「子供扱いしないでよ」

「馬鹿、俺の方が年上だ」

「……そういえば、そうだった」

そんなやり取りで手を払いのけることすら馬鹿らしくなった。

「じゃあ、背中、預けるから」

頭の手はそのままに、リコリスはそっぽを向いた。
クロードはまた笑って、頭をくしゃくしゃにする。

パレナ商会、黒髪捕縛。

決行は——明日。

??
心配症——親バカの場合（後書き）

次回は演出の関係上、二話同時投稿になると思います。
そのため一週間ほどお待たせしてしまいますが、よろしく願います！

?? 術式侵入

雨雲が、空を覆っていた。

「一雨来そうね。……魔力を探すのが難しくなる」

リコリスは多重作業特有の気だるさを持って呟く。いつもは鋭い眼孔を放つ漆黒の瞳もどこことなくぼんやりしている。

そんな幼なじみを横から見下ろしたクロードはいつものように、冗談めかして言う。

「でも、やるんだろ？ だって」

「そうよ。私は、神子だもの」

リコリスは鈍い眼孔はそのままに、桜色の唇を笑みの形に変えて。

唱えた。

「――告げる。 汝ら契約に従い、その力を示せ」

エレアノール・スコット少尉は予想以上に作戦がうまくいったことに、顔を弛めずにはいられなかった。

奴隷取引なんてやっている商会在国に立ち入られようとする、援助している貴族から圧力があったり、商会在傭兵を雇い戦いになることも珍しくはない。

今回においては前者はほとんどなく、後者においてはあったには

あつたがエレア達軍の不戦勝。

鼻歌ぐらゐは歌いたくなるほどだったが、それはまずこれからの用件と鼻水混じりの泣き声でかき消される。

目の前のまったく可愛げも飾り気もない机に座り、めそめそと泣いているのはパレナ商会の主、ルロイ・ライオネル。

マルチタスク
多重作業を駆使し、数分もかからないうちに組み上げられた幾重もの罠。

パレナ商会の瓦解した瞬間は短かった。

軍の突入と同時に逃げ出そうとしたものは、商会の敷地を囲うように編まれた魔力による壁によって阻まれた。魔力純度が高すぎる故に金色に輝く壁は異様だった。

数日前からかけられた感染型の術式によってパレナ商会とつながりのある者はエレアがライオネルに投げつけた書類にすべて記されている。

エレアがたどり着くまでに彼はかなりの恐怖を味わったことだろう。途中経過を見れなかったのが残念ではあるが。

エレアは泣いているだけで何もしない彼を——こういう人間は彼女が嫌いだ、特に男の場合——苛立たしげに見つめ、

「さて」

わざと靴音を鳴らして机の前に立つ。

ライオネルはあからさまに怯えた表情で目の前に立つ少女を見つめる。

エレアはたれ目気味な目で精々威圧的に見えるよう睨みつける。
この姿は確かに憐れみを誘うが、もちろんエレアは容赦はしない。
それは軍人の責務である前に彼女の正義感が許さないからだ。

彼が怯えているのは財産を失うからか、それとも自分の部下や家族の人生を奪った罪悪感からか。

何にせよ、それは自業自得と言うもの。

エレアは容赦なく、尋問する。

恐らくこの調子だとすぐに白状するだろう。

「奴隷の隠し場所について、そろそろ吐いて下さいますか？」

ところが彼は驚色の瞳を動かし、小声で呟いただけだった。

「……神子様を呼んで下さい……お伝えしたいことが」

エレアの瞳に怒りが宿る。小さな拳が異常な力を持ってライオネルの机を殴りつけた。

「それは四年前、お姉様がアルバート第二王子殿下に自ら奴隷禁止法を奏上なされたと知っての言葉ですか！」

自らリコリスの願いでもあった法を破ったにも関わらず図々しい発言にエレアは本気で激怒していた。

あまりのエレアの剣幕にライオネルは言葉に詰まる。様子を見て来た部下を無視してエレアは続けた。また癪癪を起こさないように自分を諫めながら。

「言いなさい。 そうしたらお姉様——インカルナタ大佐に取り次ぎます」

低く問うエレアにライオネルは唾を飲んだ。

「国境線をサマランカに少し抜けた洞窟の中。 関所から北になります」

エレアは頷いた。

ライオネルは扉を開けてリコリスを呼ぶと思っていたが、彼女が次にしたのは軍服から鞆を出すこと。

怪訝に思い声を出すよりはやく、エレアはにこやかに呟いた。

「——聞こえていまして？ お姉様」

「ええエレア、ご苦勞様。 こちらは今から目標に向かうわ。 そ

うね、馬だからあと数分ってとこかしら」

金色に薄く光る鞆にリコリスは返した。

通信を一時的に切ると隣のクロードに場所を伝える。

国境の森の中は広い。 あまりの広大さに迷いの森とも呼ばれるこの森は、リコリスの索敵術によって完全な地図が作られていた。

「大丈夫か？」

クロードは短く聞いて、リコリスはいつも通り自信たっぷりに返す。

「今、ので使っている術式はあと二つだし、目的に着くまでに追跡術式はエレアに返すわ」

そんなリコリスにクロードはそうかそうか、と何故か父親のように頷いた。

「馬の方も、大丈夫なんだな？」

リコリスの顔色が変わる。

思わずぎゅっと握り締めた手綱に馬は鋭く反応した。その馬にもリコリスは過敏に反応する。

小さく聞こえた悲鳴はあえて触れないで置く。

「ばばば、馬鹿っ。思い出させないで！」

黒髪を翻して馬を走らせたリコリスにクロードは苦笑して追いかけた。

「そんな馬鹿な……！ あんなに遠くにいて、二重の術式など神子様といえど出来るわけがない！ 座標の入力だって、現地にいなければ機能しない！」

思わず立ち上がって叫ぶ彼に、エレアは表情を変えずに答える。

「付け焼き刃程度の知識はあるようですわね。確かにあの術は座標の入力が必要。座標はその日その時の精霊の様子によって入力方法が異なる」

窓際に行くと、未だに立ちはだかる金色の壁がよく見えた。あきらめの悪い商人がまた一人連行される。

エレアは商会主の視線が自分だけに向いていることを感じ、振り返って出来の悪い子供を見るように微笑んだ。

「術式崩壊スベル・アウトをご存知？」

ライオネルは怪訝そうに答える。

一見この質問は無意味に思えるからだろう。

「相手の術式に無理やり侵入し、制御を妨害することによって起きる。術として体を成さない為に起きる崩壊現象」

エレアは頷く。

リコリス・インカルナタの魔術の才能の異常性。 それを知った
り、他人に教えたりする喜び。

（なんというか——そう、ぞくぞくする）

古来魔術というのは『人間を越えること』を目的にした文学だったという。

不老長寿に金の錬成。 それらの未だに達成できていないもの、
解明されたものの技術を理解したものを『境界を超えた者』と呼び、
それを目指していたため魔術は発達した。

今では笑われるだけの存在となった『境界を超えた者』。

でも、彼女——リコリス・インカルナタならなれるかもしれない。

そう思わせてしまう程の才能が、リコリスにはある。

それがエレアがりコリスに入れ込む理由の一つ。

そんな喜びを感じながら、エレアは聞く。

「では、術式侵入クラックは？」

今度は答えないライオネルに、エレアはつまらなそうに視線を窓に戻して言った。

「お姉様が最近開発したものですものね、所詮商人は商人ね」

窓の外には、未だに金色の壁。

一旦手放したその壁の制御感覚が、また戻ってくるのを感じる。

「術式崩壊と同じく、術式に侵入する。でも中途半端な崩壊ではなく、それを完全に奪う」

ライオネルが背後で絶句した。

個人の魔術回路、感性は異なるため術式は個人で少しずつ違ってくる。

リコリスはそれを調整し直して、自分で使えるようにしたという。

「もうお分かりでしょうけど、今回は私が座標を入力、報告した術式を奪ったお姉様が制御していましたわ。作戦中は私、一つも魔術を使っていませんの」

それも多重作業で二つも。マルチタスク

そしてその術式は、エレア用に修正された形でエレアの制御下に戻りつつある。

「見つけた!」

運動面においてはリコリスを超えるクロードは、彼女を追い抜いていち早く見つける。

商人らしき人影を見つけたと言い残して走り去ったりリコリスは

「独断専行しないっ！ 待って、今のは違うの、これ以上早くは――」

必死で馬と戦っていた。

今や真っ青になったライオネルは机に向かって何かを早口で呟いている。

「お姉様への伝言なら、牢で聞きますわ」

エレアはそんな彼に近づいて連行しようとする、

「な、なんですの！」

その腕を恐ろしいほどの力で掴まれる。

「違う、それじゃ遅すぎる……！」

「だからなんですの！」

必死の形相の彼にエレアは思わず怯みかけるが、強気の視線は崩さない。

「これは罠だったんだ！ 私じゃない、神子様への――！」

?? 雨は降る。勝者にも、敗者にも

雨が、降り始めていた。

雨はその場の気を隠してしまう。リコリスが周囲に放っている索敵術式も上手く動いていない。

どっちにしろ、事件はもうすぐ終わる。

リコリスは《黒髪を見つけたかもしれない》と栞を通じて連絡してきたクロードを追いかけるのを諦めていた。

栞は未だに金色の光だけを発していて、緊急用の赤、応援要請の青の光はない。

恐らく大丈夫なのだろう。

クロード・ストラトスはリコリスがいなければ神子扱いされていたであろう秀才だ。特に体術面で。

リコリスは散々手こずった馬の手綱を木に引っ掛け、隠し場所であろう洞窟の中に入る。

牢に改造された洞窟は冷たく、薄着で身を寄せ合う彼らは見るに耐えない。

軍から彼らの服代だけでも下りないかな、体も拭かせてあげたい、などと考え、同時に首都に戻ったら暖かい紅茶を飲んで、存分に寝てやろうと決意した。

そんなことを考えながら、リコリスは簡単に見つかった無人の商人用の部屋から鍵を持ち出した――。

「どういことですの、それは!？」

エレアはもう我慢が聞かず、ライオネルの胸ぐらを掴んだ。

怒鳴り声を聞いた部下が彼女を押さえようとするが、それでもエレアは手を離さなかった。

「答えなさい、ルロイ・ライオネル！」

「罠だったんだ！ あの黒髪は初めから私の商会に協力するためじやなく、戦争を起こさせようとしていたんだ！」

「だから、それがどうしてお姉様に――」

ライオネルは開いていた目を更に見開いた。

「わからないのか、神子様を陥れることとティターニアの品格を落とすことは同義だ！ 神様がもし、サマランカに何かしたら！ そんな時に他の神子が現れて、彼女が偽者だとも言ったら――」

エレアがようやく手を離れた。ライオネルはぼとつと音を立てて椅子に倒れ込む。

額を押さえて蒼白な顔でよろついたエレアを部下の一人が支えた。ライオネルは未だ息も絶え絶えに、しかしはっきりと告げる。

「そうだ。……戦争が、始まる……」

それも、ティターニアに分が悪い形で。

後のことは、いくら混乱しているエレアにも分かる。

口封じとして、リコリス・インカルナタはどうなるか。

「お姉様……」

エレアは知らず、栞を強く握りしめていた。

不意にスカートの中が熱を持った。

(エレア?)

それは緊急用の赤い光による警告。

振り返ろうとしたその視界の端に写った黒。

それが何なのか理解する前に、彼女は。

《——クロード大尉!》

「なんだエレア! 今は忙し——」

そう言ったクロードは鋭く身をよじる。

剣があった。

数瞬後には鈍く光る大

「人の真剣勝負中におしゃべりとか、余裕ですねえ大尉、殿ッ!」
「ふ、ざ、け、んなっ!」

字面だけ見れば軽口の叩き合いだったが、それは正真正銘殺し合いだった。

目の前の短い『黒髪』を靡かせる恐らくクロードと同年代の青年。犬歯を見せて笑うその表情はまさに戦闘狂を思わせる。

大してクロードはあくまで冷静に、務めていつも通りの表情でありしらっていた。

決めとばかりに振り下ろされた相手の剣を完璧な角度で受け流す。

絶技、と呼んでも良いほどの華麗な動作。

(何だよ、この違和感)

しかし彼は心中苛立ちを感じていた。物足りないのだ、目の前

の黒髪に。

（こいつが、リコリスと同類？）

違う、と本能的に感じた。　ポーカーフェイスの瞳に一瞬だけ、怒りにも見える光が宿る。

それに目を剥いた彼目掛けて、クロードは剣を薙いだ。

黒髪が吹っ飛んで、その下から眩い金髪が出てきた。

「……ズラか！」

真面目に叫んだクロードは吹き出しそうな顔をした彼の一瞬を突いて剣もぶっ飛ばした。

武装を解除された彼は自らの得物を目で追ってあー、と呻いただけだった。

クロードが剣を構えて警戒するも彼は拗ねた子供のような声でいーよ、と言う。

「ズラじゃねーし……まあ、作戦は成功したし。　ねえ、大尉殿」

犬歯を出して、ギラリと鮮烈な笑顔を浮かべて、彼は言った。

「リコリスお嬢様は、大丈夫？」

「――う、あッ」

ざくり、と肉が裂ける感触がした。　本能、というべきか一瞬で術を発動させ背中を斬った敵の視界を光で奪って洞窟から逃げた。

（気配もなしに背後に回るなんて）

リコリスは舌打ちしたい位だったが、それもするような余裕はな

い。

十字に斬られた背中の傷に魔力を集中的に集めて治癒を高める。
マルチタスク

多重作業を限界まで起動させることによって痛みを完全に締め出す。

「ああ、やっぱり動き鈍いね」

「！」

洞窟内から異常な力による踏み込みで一気に眼前に表れたその人物。 リコリスは魔法陣の盾を作って受け止める。

真っ黒なローブを目深に被ったその人物は、どこかで聞いたような声でリコリスを嘲った。

当然、リコリスも黙ってはいない。 軍服からボトボトと大量の血をながしながら、汗だくになった美貌を笑みの形に歪めて叫んだ。

「そっちこそ、頭回ってないんじゃない!？」

金色の魔法陣からまばゆく輝く鎖が相手の右腕を武器ごと拘束していた。 相手は身を振ろうとするが、当然鎖は動かない。

「契約に従い、業火をここに。 仇なす者に、炎帝の制裁を！」

リコリスはそのまま飛び退いて詠唱を完成させる。

近接技を使う敵用の戦法だった。 これでほぼ終わる、いつものなら。

(やっぱり……)

発動が終わったそこには、相手がまだ動ける状態でした。

異常な力、技。 運動音痴なりコリスにだって分かる。

これは普通の人間にできる技じゃない。
間違いない、この敵は神子だ。

リコリスは腰を落として体勢を整える。それを待っていたようにゆらり、と立ち上がった敵は言った。

「傷、大丈夫なの？」

何を、と言いかけたリコリスを遮るように続ける。

「魔力を傷に回さないと治らないでしょ。それに魔力強化を続けないと君、もう立ってられないんでしょ？」

弱みをつかれた彼女は激昂した。

それは最高の神子になることを求められた彼女にとって、最大の汚点。

だから、彼女は自分を見失った。

感情に身を任せると冷静な思考を失う、昔からの悪癖。

「――だ、」

足元に残っていた先ほどの魔法陣の残りが再構築され、

「ま、れ――！」

破ぜた。

ローブの残骸が空を舞って、息を切らして我に戻る頃には、雨は決るような強さになっていた。

（やった、かな……）

雨が地面を穿つ音、うるさいくらいの心臓音、自分の呼吸の音。それらに混じって、砂利を踏む音。すなわち、踏み切った音。

（――そんな、）

濡れた黒髪を翻し、振り返った彼女が見たもの。

今や黒く見える雲に、同化する黒い衣服。自分とわずかに色味が違う黒髪と黒い瞳。

それを最後に、リコリス・インカルナタは意識を失った。

深夜。 ティターニア王国王宮。

リコリス・インカルナタを国境にやってから十日は経つ。

二日前に降っていた強い雨はさすがに止んで、今は美しい星空が広がっている。

執務室の主、第二王子アルバートはリコリスから逐一送られてくる報告書をもとに外交策を練っていた。

音の鳴る時計は集中力を乱す、という理由で置かれていない。

そのせいで部屋の中に響くのは書類を捲る音だけ。

そんな静寂を、第二王子の執務室を訪ねるにはあまりに強すぎるノックが崩壊させた。

不機嫌げに「入れ」と告げた彼の言葉を聞いていたのかいないのか、大臣が息せききって入室した。

「殿下、宣戦布告です……！ たった今、サマランカから宣戦布告が！」

アルバートは立ち上がる。

「何故……、いや、あいつは、リコリス・インカルナタ大佐は何をしていた！？」

鋭く叫ぶアルバートに大臣は小刻みに震えながら手紙を取り出す。

「第二師団のエレアノール・スコットから書状が。今読み上げ」
「貸せ」

アルバートは時間が惜しいとばかりにひったくる。

青い瞳が少なくとも三往復はして、アルバートは深くため息をついて目を閉じる。

大臣は書状を回収しようとしたが、それより早くアルバートの手の中で握りつぶされ、ポケットの中へ消えた。

「任務中に失踪。最後にいたと思われる場所には大量の血液だけ残されていたそうだ。致死量は越えていた、と」

言葉にならない声で何か呻いた大臣を部屋に残してアルバートは歩き去る。

まず、このことも含めて兄と話し合わなければならない、と思いつながら。

あたりが白く見えるほどの雨が降っていた。雨は先ほどまでの戦いで砕かれた地面を容赦なく叩く。

仲間が持つてきてくれたローブを再び目深に被り直す。

新たな黒髪は、地面に横たわる黒髪の少女を無感動に眺めていた。背中から流れる赤い紅い血が地面を染め上げていくのを、じっと見つめていた。

「……やっぱり君は、失敗作なんだよ、リコリス」

相当な時間が経って、小さく呟く。
それに反応したかのように、リコリスの手がびくり、と動いた。

それに反応した自分は、下から睨みつけるリコリスの視線に射抜かれた。

焦点は合っていないが未だに戦意は失われていない、強い光を灯した瞳。

「……どう、してッ……」

そう言っって不格好にも起きあがろうとする彼女の姿に耐えきれず、自分はその場を離れた。

ローブの下に流れる液体は、涙なんかじゃない。
耳に入る嗚咽は、自分のじゃない。

そう自分を誤魔化しながら、新たな黒髪は走り去った。

そう、それらは雨の音に紛れて広がり。

雨の中へ、消える。

?? 雨は降る。勝者にも、敗者にも（後書き）

第一章は今回で終了です。

激動の二章、リコリスの反撃をお楽しみに！

しっかしまあ……指が痛いです笑

番外編 夏至祭、花舞う街で

夏至祭も明日に控えるティターニア首都、カンタヴェリーはいつ
もより落ち着きがない。

質素堅実を教えとするティターニア教の敬虔な信者達は普段はか
なりおとなしいが、夏至祭の一週間だけは違う。

酒や飲食はやり放題、嗜好品等は投げ売りレベルで売られ、今が
稼ぎ時とばかりにはしゃぐ商人以外は国民全員が休み。この一週
間は国民が眠らない、と言うのは近隣国からの評。ティターニア
軍の方は交代で警戒にあたるが、それでも非番の時間は遊びまわる。

飲み食い無料の損失分は一年かけて国民全員が負担する、という
体を張った祭りである。補填が出来なければその次の祭りが出来
ないので、経済システムとしてはなかなか優秀だ。

かくいうリコリス・インカルナタも明日からほとんど非番に入る
軍人の一人で、休み前の最後の書類仕事を片付けて（多重作業を使
うほど全力で）いたわけだが。ゆっくりやっても定時には十二分
に間に合うわけだが、それでもさっさと終わらせて早く帰りたい。

コンコン。

小さなノック音が、それを邪魔しに来た。

リコリスはまるで掃除中に落ちない汚れを見つけたかのように――
まあ、しつこいという面ではあってるのかもしれないが――眉根
をきつく寄せてドアを睨みつけた。この遠慮のないノック。

（一人しかいないわね）

リコリスはそばにあった本を掴んで臨戦態勢。案の定、相手は返事を聞くよりも早くドアを開けた。

「よおりコリス。仕事は進んだ、ってうお!？」

さあ大きく振りかぶって一球目。

ドアの隙間から見えた茶髪に向かってリコリスは思いっきりそれをぶんなげた。

茶髪は頭を押さえて悶絶し、リコリスは大げさに溜め息をついて、冷たい目で彼をみた。無論、時間は惜しいので報告書をまとめる手は止めない。

「……公務はどうしました、この不良王子」

言われた方はわざわざ来てやった、とか大臣共が監禁して仕事やらせるんだ云々。下から哀れっぽい目で見上げてくるが、軍属になってから四年間、こう毎日やられては通用しない。リコリスは学習能力は人並み以上にあるのだ、目の前のバカと違って。

服装を見ると軍の一般士官の軍服であり、よくも悪くも平凡な顔立ちのアルバートはあまり目立たなかったのだろう。最早お目付役と化しているレーガン少将の新任補佐から剥いたか、とリコリスはあたりをつける。そろそろ彼にも脱走の名人との対応の仕方を教えなければ。

リコリスは幼なじみであり、主君でもあるアルバートに気を使うでもなくペンを走らせながら冷たく言った。

「仕事はもうすぐ終わります。うまく行けば夕方には帰宅できるでしょうね。殿下のほうは終わられたのでしょうか」

意識、とっとと帰って仕事しろ。

アルバートの方はその嫌味を軽く受け流して、珍しく書類に埋もれていないソファアに腰掛けて、命令。

「俺、紅茶飲みたいなー」

ずびし、と音がしそうな程に眉根を更にきつく寄せたりリコリスは

「……何、飲む？」

敬語をかなぐり捨てて聞いた。

それはいつもの敗北宣言。彼が居座ることを決めたときの対処法。さっさと雑談を終わらせて探しに来たレーガン少将に引き渡す。

「じゃあ夏らしくダージリンのセカンドフラッシュな、あとティーハニーもあったらくれ」

（昨日買ったばかりなのに！）

リコリスは怒りを持ってティーハニーをスプーンたっぷり三杯、アルバートのカップに入れた。

もちろん紅茶を淹れても、かき混ぜなかった。

「んで、今年の夏至祭はどうするんだ？」

やっぱりそれが目的か。

リコリスはカップを口に運んで間を置いてから、わざと違う答え

を返す。

「いつも通り。明日は本邸に戻らなきゃいけないし」

「違う、クロードとどうすんのかって聞いてんだよ」

「……なんで、そこでクロードが出てくるのよ」

予想通りの返答だったが、リコリスは言葉を詰まらせる。アルバートの方はソファで形だけは優雅にカップを傾けている。

なんとなく腹が立って、リコリスは紅茶をもう一口。紅茶のシヤンパンとも呼ばれる香りがふわりと漂う。

「今年も女の子達と行くんじゃないの？」

去年は散々だった。

クロードのファンの女性は意外と多い。根が優しいためあまり断れないのが原因でいつも誰かに追いかけられている状態だ。

平静を装って冷たく言うが、紅茶の減りを見ればそれが嘘か本当かくらいすぐわかる。アルバートはあきれた顔をする。まるで出来の悪い子供を見るようだった。

「手厳しいなあ、お前」

「別に？ まあ、今年は軍のイベントに参加するし」

「お、あの百人抜きか。教会の飾り付けには行かないのか？」

いちいちおっさん臭い反応だ、とりコリスは思ったが敢えて口に出さなかった。

「そ。去年行って、先生に会いに行ったらもう還俗なされました、って。先生がいるからって行ってやったっていうのに」

「ああ、だからあんなに去年は豪華だったのか」

リコリスが魔術で付けた飾りは異常といってもいいほど豪華、というより派手で、サーカスかと思って近付いたら教会だった、と言う話がでるほどだった。無礼講となっていた国民には受けがよかったが、一応祭り中でも「質素堅実」と説く教会にはいい嫌がらせである。

「還俗っていえばお前は教会から還俗するときに苦労して、俺達が大分助けたよな。クロードの一世一代の告白もその時か」

話をそらせた、と思えばすぐに戻してくる。リコリスはもう叶わない、と両手をあげて降参した。

ちなみに、アルバートはカップの底になみなみと溜まった蜂蜜のせいで相当むせ、ちょうどいい頃合いに来たレーガン少将に首尾よく引き渡すことに成功した。

夏至祭一日目、夜。

夜間にも関わらず明るいカンタヴェリーは観光イベントらしく外国人の姿も多い。飾り花が町中に飾り付けられ、ここここで酔っ払いの笑い声が聞こえる。まさに無礼講。

ひとときわ明るく騒がしいのはティターニア軍本部。炎の魔術で燃え尽きないランタンが無数に置かれ、一般にも解放された軍の練習場にはリコリス・インカルナタがいた。

まつりい
政より祭りが好きなアルバートも最上級の席で見ているはずだ。

もちろん観客席と練習場は遠く、肉眼で見分けることなど出来なかったが、リコリスは恐らくアルバートは今一番わくわく、ではなくニヤニヤしているのがわかった。

すでに息が上がっていたが、黒い瞳にある戦意は衰えない。美少女かつ神子の無双に一般は沸き、次の相手はいよいよ最後の百人目。

魔術師ととことん相性が悪いスピード重視の剣士。軍で一番の剣の使い手。

——クロード・ストラトス。

戦闘のときだけのポーカーフェイス。

対してリコリスは似つかわしくない挑戦的な笑顔で告げる。

「……じゃあ、私も『本気で』行こうかな……!」

そういつて今まで一度も手さえ書けなかった細剣に手をかける。

百回目のラッパの音は高く、群青色の空に響いた。

最初に仕掛けたのはリコリスだった。

クロードはあらかじめ地面に張られていたらしい無数の魔術を交わしてリコリスまでたどり着く。

それだけで賞賛されることを簡単に見えるほど流麗にこなしてしまう。

しゃりん、と心地よい音と共に剣が抜かれ、まさにマニュアル通りの角度でされた防御は、しかし彼の剣によって防御ごと吹き飛ば

される。

魔術の触媒的要素も含むのか、やたら美しく作られたリコリスの剣は夜闇を鋭く斬った。

機械的に繰り返される攻めと守りは彼女の魔術と同じく緻密かつ完璧。隙を突くように打ち込まれる魔術。

しかしそれは単純かつ絶対的な力の差がついて回る。

「おいおい、大丈夫か？」

軽口を叩き、表情を変えずに笑うクロード。

「ちょっとは感情出さないよ、イライラする！」

対してリコリスは舌打ちしながら吠えた。観衆自身の叫び声でその八つ当たりともとれる発言に気づいたものはいない。

しかしクロードは気づいた。

それが彼女の言葉ではないことも。片方のまぶたがぴくりと動く。クロードの感情を押さえるときの癖だ。

（クロードが忘れてたら、それこそ笑い話よ、ね！）

そのほんの一瞬の隙を付いて、リコリスは前進した。

細剣の鋭く突きより早く、戦いに慣れた体が剣を構えた。リコリスが押し切るには頼りなさすぎる体力と剣。結局押し切られ、宙に舞ったのはリコリスの細剣。

予想通り、押し切ったからの二撃目。リコリスは防御陣をはり、剣が衝突した瞬間に防御の術式から爆発に書き換えた。

しかしクロードはその爆発を前に踏み出すことで回避して、間合いに入り込む。

いくら詠唱が早くても、この距離では間に合うまい。

始めて本心からの得心の笑みを浮かべた瞬間。

観衆の叫び声よりも、剣が空を斬る音よりもしっかりと、リコリスが言うことでかつてクロードが言ったそれよりも艶やかな響きを持つて。

「――」

クロード・ストラトスの一世一代の告白は告げられた。

まさか言った本人に一言一句変わらず返されたことで、剣がほんの一瞬だけ遅れて。

そしてその一瞬で、リコリス・インカルナタは詠唱を完成させた。それはクロードの体を吹き飛ばし、立て直しが出来ないほどのダメージを与えた。

呆然、といった風に見て横たわるクロード。

立っているのは黒髪の少女。

二人の世界に音が戻る。

十秒のカウントのあと、試合終了を告げるラッパが響き、

この日一番の歓声が響いた。

紙吹雪と花が投げ込まれる練習場に、リコリスとクロードはまだそのままだった。

「……なあ、あれ」

不意打ちだろ、とはリコリスは言わせない。

「あなたも私も、『一回しか』言わない。それでいいんでしょう？」

リコリスはまたしても前に言ったことをそのまま返す。ただし、恥ずかしいから背を向けて。

「はいはい、分かりましたよ」

不意打ちにかこつけた、卑怯な告白だった。でもそれは曖昧なせいで女性に人気なクロードも同罪、とリコリスは言う。

クロードは悪かったな、と力なく笑った。リコリスはそれに顔だけで振り返って、軽く誘った。

「じゃあ、今年の夏至祭は私と一緒に回ってくれる？」

夜だというのに明るく騒がしい非日常。橙色の光が夜を晴らし、投げ込まれた花が舞う。

その光景が、あまりにも綺麗で。

きっとそんな夏至祭の雰囲気のせいに違いない。

彼女はいつものように、からかうことはしなかった。

リコリスはクロードに歩み寄って、その華奢な手を差し出した。

番外編 夏至祭、花舞う街で（後書き）

物語開始以前のお話。

二章一話の途中でちよつと情報足りないっぽいことに気づいたので
投下です。

？ 変わったものは、何ひとつ

「じゃあ俺達でこの国を守ろうぜ！」

——それは他愛もない約束のはずだった。

「名前はティターニアを守り隊、でいいな」

「うっわアル、センスねえ」

「アル、私もそれ……恥ずかしい、かも」

礼拝堂の隅でいつも泣いてるあの子をなんとか笑わせてあげたくて。

馬鹿みたいな話をして、馬鹿みたいな悪戯をして。

「るっせえぞ、クロード隊員、リコリス隊員。 ならお前等で考えろ」

「ティターニア隊」

「変わんねーよ。 次、リコリス」

「わたしがつけても、いいの？」

ようやく、今にも吹き消されてしまいそうな儂い笑顔をするようになった女の子とした、約束だった。

「じゃあ、ね」

少し考えるようにステンドグラスを見上げた黒い瞳が、それを映して。

「……カルタナ騎士団」

ティターニアが遺した剣の名前を冠して答えた。

「次、腕」

「お前恥じらいとかそうゆうのねーの？」

きびきびという幼なじみ、リコリス・インカルナタをみてクロードはため息をついた。

数時間前までは生きているかどうかも疑わしいほど、息も細く眠っていた少女とは思えない強引さでリコリスはクロードの袖を捲り上げた。

リコリスはベッドの上に座り、上半身には包帯、背中 of 傷に障るからと言う理由で前を閉めずに軍服を羽織っただけの状態。多量出血をしたため顔色も、悪い。

クロードの方は軍服に少し傷があるくらいで大して怪我があるようには見えない。

看病されているのは本来逆でもおかしくはないのだが、今は彼女がクロードを治療している。

魔力を注ぎ込むと治癒力を飛躍的に上昇するという現象を用いた、魔術の中でも治癒術と呼ばれるものだった。

背中 of 傷も、意識を失う前にリコリスが治癒術を開始していたため、死なずにすんだ。

リコリス・インカルナタ初めての敗北――あの、黒髪との戦いのあと、ちょうど黒髪が姿を消した直後にクロードは倒れているリコリスを見つけた。

血に染まった大地、そこに沈んでいる少女、もう死んでいるんじゃないか――ソレが自分の幼なじみのリコリスだと気付いた瞬間、クロードの頭の中が真っ白になった。

残ったのは軍人として、感情を殺した自分。 奴隷達が震える洞窟の中に彼女を連れて、商人達の宿泊用の部屋にリコリスを寝かせた。

恐らくそれを目にした奴隷たちはクロードを畏怖の眼差しで見えていただろう、血まみれの人間を無表情で抱えていたのだから。 自分の知り合いや友人でなく、ただの負傷者として冷静に冷酷に処置すること。 そしてリコリスの治療術と才能が彼女を救った。

リコリスはもちろん、目覚めてすぐに治療術が成功していたこととクロードの処置に気付いた。

しかし彼女はそれを敢えてそのことには触れず、クロードの治療を始めた。

袖がまくり上げられたクロードの腕にはリコリスに巻かれたものよりかは幾分雑に手当されていた。 リコリスはそれを慎重にはがし、すう、と目を細めた。――魔術師の眼差しだ。

治療術は自分にかけるより、他人にかけるほうが難しい。 処置範囲の血管から神経まで、すべてを一から把握しなければならぬからだ。 正直、失敗すると、あまり笑えないことになる。

リコリスはその緊張感を十分に持って、ざくりと斬られた腕、まだ癒えきっていないそれを

「……少し、痛むわ」

「――っ」

指でなぞった。声もなく呻いたクロードにごめんなさい、と謝って傷口をもう一度なぞる。

今度はリコリスの指が通り過ぎたそばから新しい皮膚が再生して、それを完全に治した。

「ごめんなさい、痛かった？」

「いや、別に」

涼しい顔を作った彼にリコリスは柔らかに微笑んだ。

本題は、違うけど。そこにはたどり着きたくない。 たどり着けば壊れてしまうから。
クロードが切り出す。

「リコリス、背中へ」

「別に、もう治ったわ」

「……いや、それ嘘だろ」

ふざけたように言う、クロードのそれは注意だった。

細い指でクロードの包帯を丁寧にはがしながら、リコリスはまた少し笑う。

「やせ我慢をしているのはあなたかもしれません」

白い包帯が完全にとれて、リコリスは部屋の隅のゴミ箱に投げる。黒髪がさら、と揺れた。露わになったままの腕は、もう何も無い。クロードはそれを無表情に眺めて、袖を下ろす。

リコリスは投げ終わったそのまま俯く。

無理やりくだらない話をして、引き伸ばしたその果ては、結局変わらなかった。

一番弱いそこは、つつけばすぐに壊れてしまう。

「……神子は、負けちゃだめ」

心に刷り込まれた言葉を呪文のように、囁く。

「神子は、誰にも屈しちゃだめ」

自惚れでも傲慢でもなく、それは彼女の戒めだった。

幼い頃の悪夢を捨て去るための、そして悪夢そのものでもあったその言葉。

矛盾をはらんだそれが、どうしても幼い頃のリコリスには理解できなかった。

（――私、は……）

「だめだと思ってた。でも今」

クロードにとっても理解しがたい、矛盾。だから幼い彼女に声をかけた。

けれど、今のリコリスにクロードは声をかけることが出来なかった。今とあのときとは状況が違いすぎて。

その、泣いていた女の子は――

「――神子に負けた私は、どうすればいい？」

変わった、そう思っていた自分も、幼なじみも裏切って、また泣いた。

？ 変わったものは、何ひとつ（後書き）

二章しょっぱなは泣き回ですが、リコリスはこのまま黙っているような女の子じゃないです。

リコリス、クロード、アルやあの「黒髪」。

二章ではがつつり、熱く書いていきますのでよろしくお願いします。

？ 淡い思い出を切り裂いて

兎にも角にも、基地に戻らなければ始まらない。

「奴隷たちの受け入れもしくちゃいけねーし、ここで三日間寝てた分も取り返さなくちゃな」

珍しく率先して言ったクロードに、リコリスは堅い表情で頷いて。

「……まあ、街に入れたらの話だけだね」

リコリス達は森の出口から、木々に隠れるようにして立っていた。

検問所には通常の二倍は超える兵。数百メートルは離れた森の中からもわかる、ぴりぴりした緊張感。

厳戒態勢の国境の街、戦時下には最初の砦となるアーガイルの検問所を見て、言った。

「ちょっと、どういうことよ」

リコリスが苛立ちも露わにクロードの服の袖を掴んだ。本当は引っ張って木に押し付けたいくらいだったが、今の彼女にはそれは難しい。

振り向いておい無理すんな、と言ったクロードを漆黒の瞳で睨みつけた。

「前に様子を見たときは変わりないって言ってたじゃない」

「前は前だろ。状況は毎日変わる」

「だからって、こうまで増員される普通!？」

声を荒げるリコリスにクロードは観念して答えた。視線は合わさない。

「悪い、あれ虚偽報告」

今度こそリコリスはクロードを木に押しやった。息を切らしているのはきつと、傷のせいだけでない。

「……普段だったら軍法会議ものよ、ストラトス大尉」

癩癩を抑えつけるようにその声は低く。対してクロードは敢えて軽い風に謝る。

「他になんかないでしょうね」

「ちよっと前に搜索隊がきた」

「なんて言わないのよ馬鹿! 絶対チクってやる!」

もういい、とリコリスは黒髪を翻し、話を戻す。リコリスがあまりに検問所のほうを注視するので、クロードは兵士のひとりひとりの見分けすら付いてしまうんじゃないかと思う。

「厳戒態勢敷いといて、あくびとはね……」

訂正、リコリス・インカルナタは見分けるどころか挙動までしっかり見ていた。

「とにかく、エレアに会いましょう。やることが山積みよ」

奴隷の受け入れ、商会についての報告、黒髪の報告、とリコリスは指折り数える。黒髪、とつぶやいたときに眉間に刻まれた皺に、いったいリコリスは気づいていたか。

「エレアは大丈夫かな」

「最後に会話したのはあなたでしょう。　エレアなら大丈夫よ」

トリコリスは言う。　逆に向こうはリコリスのことを心配しているだろう。　あの日、リコリスの葉を通して二人に発した警告を最後にエレアとは連絡が取れていない。

リコリスは小さく嘆息して、スカートの中から葉を取り出した。　あの日以降、この葉はただの紙切れになっている。　術者たるリコリスが昏睡状態に陥ったせいで魔術は解けてしまったからだ。　睡眠状態ならまだしも、昏睡のように問答無用で意識を遮断されてしまった場合、いかな神子といえど太刀打ちできない。　すべての魔術は無効化されるのだ。

そしてリコリスにとって、それは非常に問題で。　目覚めてから異様にクロードが気を使うのも、そのせいだろう。

（もっとも、そうしてもらったほうがありがたいことはありがたいのだけれど）

生憎、今の彼女達には見栄を張る時間は残されていない。　検問所の厳戒態勢を見る限り、ティターニア・サマランカ間の緊張状態に進展――進展と言っても恐らく悪いほうに――があったのは確かなのだから。　基地に戻るのは早ければ早いほどいい。

「そろそろ行きましょう」

ついに姿を隠すことなくリコリスは歩き始める。　検問所の兵達が気づいた様子はない。　さらに歩みだそうとしたリコリスの腕を、不意にクロードが掴む。

彼はしばらく言いづらそうに口をもごもご動かすと、つかえていたものを吐き出すように言う。

「……念のため、いつでも戦えるように準備しといてくれ」

何故か神妙な表情で言うクロードに、リコリスは圧されてこくと頷いた。

「……インカルナタ大佐、ストラトス大尉！？　生きておられたのですか！」

「……、ええ」

検問所の前にたどり着いた二人は開口一番、そう言われる。部下という立場から、リコリスより一歩退いて立っているクロードは表情を動かさず、リコリスは秀麗な眉を一瞬顰めた。

出血量はひどかったかも知れないが、ほとんど死亡確定のような反応をするかということ。　けどそれよりも気になったのは、兵士達の表情だ。

ところどころ拾えたぼそぼそ声の会話は「まずい」だとか「やりたくない」だとか。　死んだと思われた人間の生還に対しての反応にしてはおかしい。　視線だけを巡らせるリコリスに、クロードが近づいて耳打つ。

「――逃げるぞ」

身長差が大きいため、それは決して地味ではなかったが幸いにもざわめく彼らには見えなかったらしい。　リコリスはほとんどわからないほどに頷いて「あとで教えなさいよ」と囁く。　少なくともクロードはこの異様な雰囲気心当たりはあるらしい。

リコリスもわからないなりに推測する。
(何か嫌疑をかけられてるとか?)

そのうち一人の兵が進み出た。

「あ、あくびの」

「はっ？」

思わずつぶやいたりリコリスに彼は怪訝げに聞き返し、リコリスは肩をすくめる。奇妙な会話とは裏腹に、張り詰めた緊張は増す一方だ。

「トニー・フラメル曹長であります。大佐」

名乗ったくせに、敬礼はしない曹長にリコリスは警戒を強めた。衣擦れの音がして、背後に控えたクロードが剣に手をかけようとするのがわかる。

軍人たるもの、敬礼は味方にしかない。

それはすでに、リコリスをテイターニア軍人だとは思ってはいないということ。

「我々のご同行を」

「基地に？」

尋問でもどうぞ、という意味をはらんだ言葉。

「いえ」

意外な返答だった。

曹長はすっぱりと答える。まるでそれが当然のように。

「ティターニアの御前、教会に」

ここでどうして教会が出てくる、と思わず呆けたりリコリスの手首を、

「お断りだ！」

クロードがぐい、とひっばる。後ろに引っ張られた彼女の数瞬前までいた場所には空をつかむ曹長の手。

リコリスはその光景に何とか理解が追いついた。ざわめきの正体が軍人にありがちな罪の濡れ衣ではなく、神子に関するものだという事。大体すでに還俗し、軍属となった彼女の身柄を教会が引き取ること自体がおかしいのだ。

とにかく逃げなくてはまずい。そう考えたリコリスは、空いた方の手を使ってウエストポーチから瓶を放り投げ、同時に詠唱を終える。

とにかく逃げなくてはまずい。そう考えたリコリスは、空いた

割れた瓶から出る煙と眩い閃光が彼らの視界を奪う。
咽せる兵の中、自らもふらつきかけたその手を、幼なじみの青年が掴む。

リコリスは幼なじみの手を強く握り返す。

（――「じゃあ、背中、預けるから」）

いつかの自分の言葉がふいに脳裏をよぎる。その淡い回想を切り裂くように鋭く、クロードは叫ぶ。

「――逃げるぞ！」

？ 照れ隠し

「ちょっとどういふことよ、これ！」

リコリスはそう叫ばずにはいらなかった。クロードに連れられ、兵の中を突っ切ってきた方がいいが、状況がまったくわからない上に今なお全力疾走させられている状況である。

流石に大通りを通ったりはしないし、人通りも少ない場所を走っているのだが、それでも街中を全力疾走する男女とは目立つ。追っ手の方も探しやすいのか、さっきから数が減っていない。

リコリスの手を引いて走るクロードは突き刺さる市民の視線と追っ手の声に舌打ちし、速度を上げた。

「ちよつ、ちよつと」

引っ張られたリコリスはもう無理、とばかりに声を上げるが、クロードは今回ばかりは言うことをきいてくれそうにない。

その速度で、ずっと脇道に入る。

そこから先は、細い道が入り組む暗黒街。

黒髪がなびく。リコリスは自らの髪が目立ちすぎることを思い出して、小さく詠唱を始めた。

耳障りのいい囁き声。

精霊を使役するのではなく、自らの魔力を直接操るアルトリア式魔術。そのなかの一つ、幻惑術。

五つ目の路地を曲がり終える頃にはもう追っ手の声は聞こえなくなっていた。

徐々に速度を落とし始めたクロードに合わせてるようにリコリスも速度を落とす。路地の角に隠れるようにして二人で立ち、リコリスは肩で息をしながらもクロードに聞いた。

「……どう？ 成功してる？」

クロードの目に映ったのは亜麻色の長い髪に、澄んだ翠の瞳の少女だった。元の整った顔立ちは変わっていないが、髪や瞳の色が変わったせいか儚さが強調され、黒髪の時よりも華奢に見える。走ったせいで紅潮した頬は見事な桜色。

華やかな印象になったため、黒の軍服が恐ろしいほど似合わない。そんな「軍服の似合わないリコリス」を奇妙な気分で見つめ、

「まあ、成功してる」
とだけ答える。

（……まあ、それだけよね）
何故か落胆した自分に少し腹が立って、亜麻色の髪をぶんっと振って背を向けた。
まったくどうしてこんなのが女人気があるのか、と思うのは八つ当たりかもしれない。

「おい、どうしたんだよ」
「別になんでもない」

背後から聞こえた声に不機嫌を隠しきれずに答えてしまう。

「とにかく、さっきのわけを教えなさいよ」

くるっと振り返って言えば、クロードを口ごもり、不意に妙案を思いついたような顔で答える。

「それより、幻惑術使って顔の形変えられないのか？」

「何回も言ってるでしょ、幻惑術は視覚のごまかしであって骨格をいじると触られたときにすぐバレる——ってもものっすごい不自然に話をそらせないで」

お前思いつきりのせられてたじゃん、と言うクロードの呟きは無視。どんなときでも魔術関連の話題には食いついてしまうリコリスは変人エレアノール・スコットをして「魔術オタク」と評される。

一步、クロードに近付いてもう一度問う。

「どうしてあんなに検問所で警戒していたか。まるでこうなることがわかっていたみたいよね？ 大方、捜索隊が来たことを黙っていたことと関係あるんでしょう。——言いなさい」

その念を押したような最後の言葉にクロードは観念したように、ただし翠色の瞳を避けるように答える。

「捜索隊の様子が、おかしかったんだ」

「どんな風に？」

今度はリコリスの顔を真剣に直視する彼。

「…………、まるで、犯罪者を探すみたいだった」

ひとことひとことをまるで吐き出すように言うクロード。

「……………そう」

無表情に答えたりコリスをクロードは今度は怪訝そうな顔で見
ていた。 何よ、と言うとそのままの顔で答えた。

「いや、もう少しショック受けるかなと思ったんだけど」

視線を逸らすのは今度はリコリスの番だった。

「この前泣いたとき、たくさん励ましてもらったからね」

照れくさいからか、少し口調が砕けた、その言葉。

術の効果もさることながら、いつも以上にらしくないリコリスに
クロードは苦笑する。

そして、その背後に――

？ 照れ隠し（後書き）

今回はちよつと分量少なめです。
次回、ちよつと影が薄い人^{むしろないかも}が再登場？

？ 思いがけずの再会

「……お姉様っ！」

薄汚い家の中、粗末な椅子に腰掛けて待っていた彼女、

「心配かけてごめんなさい、エレア」

エレアノール・スコットは疲れきった顔に溢れんばかりの喜色を持ってリコリスに抱き付いた。

状況が状況だからか、今回は怒らず、むしろ自分より背の高いエレアに寄りかかるようにしているリコリス。それを後ろからほっとしたような、それでいて安心しきってはいない表情で見守るクロード。

その原因たる人間は彼らの後ろ、家のドアをぴったりと閉まったかどうか確認しているところだった。

塗装も剥げたドアを注意深く見守る彼女。 豊満な胸はリコリスと会ったときと同様に大胆に露出されて、巻きスカートの下にズボンをあ履いているにも関わらず、その腰つきの良さは服越しにもわかるほど。

リコリスにとっては遠い昔に思える、数日前の夜。 まだ黒髪の情報など掴んでいなかった頃に酒場で出会い、どうやら酒の勢いで、喧嘩した、らしいギルドの女。

結果はもちろん魔術を連発したらしいリコリスの勝利。　　どうやらその時に女含めた代金をリコリスが払った、らしい。

さっきから「らしい」が続いているのはリコリスが酔っていた間の出来事をまったく思い出せないからだ。

「まったく、大変なことになったね」

女性にしては低めの声で切り出した彼女は椅子にどっかと腰を下ろす。

「しっかしまあ、ホントにあんた神子？　見事に化けてたもんだね」
エレアに抱きつかれたリコリスは未だ術を解かず亜麻色に翠の瞳。
人間離れた美貌を遠慮もなしにじろじろと見て「動かないなら人形として飾るときたいわ、うん」。

「……助けてくれたことにはお礼を言うわ。　説明をしてくれたらさらにお礼をしたいんだけど」

その無意味な言葉にしびれを切らしたのか、リコリスは切り出す。
「相変わらずしゃべると可愛くない」とやはり無遠慮に呟くと、
手元の板にチョークで文字を書き連ねていく。

「これがあたしの名前」

指し示したそこには少々変わった名前があった。

「……アイリス・クロイツ？」

「違う、ハノンブルク語か。　ならイリス・クロイツァーが正しい読み方だな」

リコリスと同じくすかさず覗き込んだクロードは足を組んで見守

る彼女に目線で問う。

「やるじゃん、正解」

「……………むー」口に出すのが悔しかったので、服の裾を掴んで説明を求める。クロードは少し言葉を選んでいる間にイリスが答える。

「数世紀前の移民でハノンブルクからこっちに流れた奴らがいるだろ？ そっちは帰化したことでティターニア読みになった。まああたしがその移民の子孫だったらアイリスで合ってたと思うけどね」「つい百年前まで、クロイツァー姓は色々大変だったから移民なんてできたわけがない。だからせいぜい、移民一世二世くらいだろ？ 帰化しても読みを変える習慣は廃れてきてるから、もとの読みで『イリス・クロイツァー』」

饒舌に説明する二人を交互に見てため息を吐いたのは背後のエレア。

ため息は知識不足だったリコリスではない。

「クロード大尉、歴史オタクの知識を披露している場合ではないと思いますの」

「というかあなた、教会の授業は剣術しか出なかったじゃない。

歴史なんか私が教えてもちんぷんかんぷんだったくせに、なんでそんなに詳しいのよ」

専門の民族学の本でも開かない限り得られないわよそんな知識、トリコリスは毒づく。魔術師の彼女も人並み以

上に歴史に通じているが、そんな知識は得ていない。なにがきっかけでそんなに興味を持つようになったのか。というか、非番の日は寝るか剣を振るか剣を磨くか寝るかのクロードが本に向かう姿が想像できない。

「別にいいだろ、なんだって」独り言が漏れていたらしい。「まあ本題に入ろうか？」

一向に視線を合わせようとせず言われてもいまいちやる気にはならないのだが。

——それでもやるべきことは早急に。

頭の中に冷徹な自分の声が響いた。

「まず、恩人に尋問するようで悪いけど——」

リコリスは考えを整理するかのように、人差し指を中空でぐるぐる回す。説明の仕方に気に入らないところはあったが、まずはまとめる。

ほとんどイリスが話していたので情報が出揃わないのは無理もない、か。

「まず、要約すると」

イリス曰く、軍に居辛くなり（危険すら感じた、というのはエレアの言葉）、あの酒場で泣きながら飲んでいたエレアと再会し、ここに匿っていたこと。検問所での騒ぎを聞きつけ、エレアに頼まれたイリスがいずれリコリスがここに逃げ込むだろうと見越して待ち構えていたこと。

「エレアノールから幻惑術の話は聞いてたし、実際見つけたときもあんまり上手く化けてたから、人違いかと思ったんだけど」

ゲームに勝った直後のように、イリスは笑う。

「うちのギルドには女の顔だけは忘れないクズがいるから、断定はできたよ。さすがに少し手こずったみたいだけどね」

この前路地裏で売春婦どもに殴られかけてただろ、と言う。

「あの時のやつか」と呆れたように笑うクロード。

「まあ、その点に関しては感謝するわ、ありがとう」

リコリスは頭を下げる。イリスはさすがに少し驚いたらしく、椅子から腰を浮かしかけた。浮かした、のではなく浮かしかけたのは、リコリスがすぐに視線を移したからだ。

抉るような鋭い眼光を、部下であり友人のエレアノールに。

磨かれた氷のような鋭い視線にエレアは肩を跳ねさせる。イリスから見たその横顔はとても端正だった。作り物の翠の瞳の奥に、闇夜に紛れてしまいそうな冷たい黒を見たような気がして、思わず寒気すら感じる。

「エレア、話して。すべて」

尚も俯くエレア。その顔はどこか駄々っ子のように悲しげで、その理由は聞くまでもなく。だからこそ、リコリスは脅すように続けた。免罪符を与えるために。

神子、というよりリコリス自身が問題になっているのは先程の騒ぎを考えても間違いない。しかし、リコリスはティターニア教会

の象徴といっても過言ではない「神子」だ。

その地位をもつてしてもリコリスが兵に追いかけて回されるというのは、どう考えても異常すぎる。

ましてや彼らはテイターニア国民市民層、最も教会に忠実な信徒と言える。その彼らが、なぜ「神子」に刃向かったのか。

思考を巡らせつつ、追求する。

「エレアノール・スコット。私のためと思って黙ってても、何の解決にもならない。あなたが黙っているのなら、あなたが危険を感じたという基地に行って、問い詰める」

クロードが息をのんだ気配がした。同時にエレアが小動物のような俊敏さで顔を上げる。

「そんな危険なことっ、させられません！」

それなら、エレアが取らなければならない手はひとつしかない。未だ怯えた瞳のまま答えた。

「話します、すべて。ですが、そのかわり」

意外そうなりコリスとクロードの視線、よく言っただけのイリスの視線がエレアノール・スコットただひとりに注がれる。

「お姉様の、神子の『秘密』——教えていただけませんか？」

？ 神子の『秘密』

「お姉様の、神子の『秘密』——教えて、いただけませんか」

日も暮れかかった小屋の中に響く凜とした声。 刺すような視線。

イリスは「面倒に関わるのはごめん」とすでに部屋の外に出ている。

リコリス・インカルナタは気怠げに、しかし甘美に髪を梳く。
その髪色は当然、黒ではない。

「答えられる、範囲なら」

違和感しか覚えない、その光景をリコリス・インカルナタは目に
焼き付けながら言った。

「神子の弱点は」

そう短く核心を突いたエレアに、リコリスは「長くなるわよ」と
断って話し始めた。

——そもそも、神子とは。

そうティターニア民に聞いたなら、彼らは子供でさえそんなこと
も知らないの、と失笑しながら答えるだろう。

定義としては「あるひとつの分野において異常なまでの才能を持
ち、黒髪黒目を有すること」。

「そんなこと、知っています」

そこまでリコリスが話すと、エレアは無然と言う。話を逸らされていると感じたらしい。

しかし答えるリコリスに遊びはない。これはほかでもない「本筋」だ。

「恐らく、理由は神子が《境界を越え》ないように、要するに人間の範囲内でいられるように調整なんだろうけど」

とりコリスは前置きする。エレアは更に眉をひそめた。

この次はエレアを含めたほとんどの国民が失念している。リコリスは黒ではない瞳をエレアに向ける。エレアはまっすぐに、少し怒ったように見つめ返す。

「神子の才能はひとつの分野にのみ発揮され、それ以外の能力は極端に落ちる」

見つめ返された瞳が、揺らぐ。

それは教会によってひた隠しにされてきた事実。

（――「神子は完璧でなくては」）

教会は絶対的な崇拜を得なければならなかった。ならば、その教会の象徴たる神子は、完璧でなければ。

そんな教会にとって、神子のこの欠陥――つまり、得意分野以外は凡人以下という事実是非常に不都合だった。

それを隠すために、教会は百年ほど前から神子の保護を始めた。この欠陥が誰かに知られる前に教会がそれを隠すために。

（――「神子は完璧でなくては」）

幼い頃に教会に保護されたりコリス・インカルナタに刷り込まれたこの言葉が、すべての答えだった。

ある時は凍えそうな大理石の上で、ある時は勉強部屋の中で。繰り返し言われた言葉。 神子自身に、それを隠すように仕向けるために。

「……お姉様は」

なんなのか、とか、どうやってとか、やっと聞けるようなそんな震えるつぶやきの意味を正しく汲んで、リコリスは表情を変えずに答える。

「私は魔術師で、体力がない。 だから」

まさか、とエレアが視線を向ける。 体力を上げたいなら、魔術師なら誰もが思いつく簡単な方法。 しかし、それは技術的にはほとんど不可能で、第一、危険すぎるその方法。

「魔力で、強化したの」

身体中に魔力の血管を張り巡らせること。 肉体に魔力自体危険で、その魔力が血管ひとつ、神経ひとつにでもかすたら即座に死んでしまってもおかしくない。 昔、実践した魔術師が失敗し、全身を破裂させて死んだ、凄惨な事故として今も語られるそれを。

エレアノールは今度こそ絶句する。

そんな方法を、平然と口にした彼女は、それ以上の追求を許さず、微笑んで言ったからだ。

「さあ、そちらのことも教えてくれる？」

夕焼けの赤に染められたその整った顔は、しかしひどく歪に、笑

った。

冷めかけた紅茶が執務机に若干乱暴に置かれた。

明るい木目調の机には白磁のティーカップがふたつ。　ひとつは彼、アルバート第二王子の分。

もうひとつは彼の兄にして、この国の実質の統治者、第一王子エドワードの分。

夜も遅く、静まり返った城の最深部第一王子執務室。　国王が病に伏せている今は、その部屋の主がこの国の最高権力者だ。

その部屋の中で、国の二番目の権力者、第二王子アルバートが口火を切る。

「第七師団によると未だにサマランカ国民に布達なし。　が、向こうの城の方は相当ピリピリしてたらしく、城の中まで入り込めなかったらしい」

「軍備を整えている、と考えていいな」

傍らの書類を見ることさえせず、兄に報告したアルバートは一息着くように紅茶を口にする。

あの晩からアルバートはほとんど寝ていない。　リコリス・インカルナタの報告書にはサマランカ側に戦争の気配がなかったとある。

「あの神子に担がれたんじゃないか」

報告を受けた兄は、泰然と笑う。　彼だって、リコリスの失踪を知らないわけではない。　死亡の可能性すらある「失踪」者をその

幼なじみの前で馬鹿にする。　しかしアルバートはその挑発に乗ることなく反論する。

「アホか。俺だってリコリスの報告だけを鵜呑みにしてるわけじゃない」

手元の報告書の束にはリコリスのもの以外にも第七師団、通称情報局からの報告がある。寝る間を惜しんで精査したのはアルバートだ。

「どれを見ても同じだ。サマランカ側に戦意はなく、あるのは「黒髪」への疑惑のみ。向こうも俺達と同じように調査を出し、和平交渉の準備もしていたらしい」

エドワードは弟と同じ赤銅色の瞳で、報告書を一瞥する。

「んで、その矢先の宣戦布告か」

弟と対照的に優雅に紅茶を啜るその仕草に苛立ちすら覚えるアルバート。

（リコリス・インカルナタに言わせれば「兄と比べて」）素直な自分としてはこういう会話は非常に面倒くさい。余計な言葉遊びもごまかしも許さず、一言一句違わず暗記している布告文を読み上げる。

「我々サマランカは、神子リコリス・インカルナタによる皇帝暗殺が計られたことに強く遺憾の意を示し、またティターニアの名のもとに報復する」

ただし、その暗殺は失敗に終わったようで、使用人が逃げる黒髪を目撃したとある。

エドワードはカップから視線を上げて「で、やったと思うのか」と問う。アルバートは肩をすくめて否定する。

「いくらあいつが魔術の天才だろうと単独で国境を越えられる体力かない。大体、あいつにはサマランカの皇帝を殺す理由がない」
失踪者の話題だと感じさせないくらいに、さらりと答えた。

ただ、厄介なのは書状にある「皇帝暗殺の日」と言うのはパレナ商会を逮捕した日、要するにリコリスが失踪した日だったこと。
アルバートは幼なじみとして、というよりは現実的に考えて否定した。が、それをサマランカが素直に納得するはずがない。

「それに、教会まで向こうにつくとはな」
ティターニアの名の下に、の一文は教会がサマランカに大義を与えたことを示す。はあ、と溜め息を吐く。まさに寝耳に水、の話なのだ。

（貴族の教会離れやリコリスの還俗の件があったものの、教会にはリコリスやティターニア王国を裏切る必要があるのか？ サマランカも何でそんな）

前述したように、リコリス・インカルナタが皇帝を殺そうとしたようには思えず、手持ちの情報から考えるとただの狂言、ともうひとつの可能性がある。

皇帝暗殺未遂の犯人は、リコリスが追っていた、「黒髪」によるものだという線。

わからないことだらけでは対策の立てようがない。今必要なのは確かな情報と、近いうちに動き出すサマランカ軍の対策。

「とりあえず、宣戦布告については一般人に対しての箱口令を敷いたが、そう長くは持たないだろうな」

アルバートの言葉にエドワードが続けた。

「だが、宣戦布告内容は国民に不安をもたらしかねん。状況を精査する必要がある。訳も分からないまま情報を開示して、内戦起こして終了なんて冗談じゃな——」

コンコン、と控えめな音。そのノックはしかし、ドアの向こうからではなく、窓の方から聞こえる。

見覚えのない、一般に売られているような長距離用の伝書鳩が、そこにいた。

「——、あ」

アルバートは気の抜けたような声を出す。

何故ならその鳩の首に、リコリス・インカルナタとの密書用の鳩に使われていた、見慣れた黒いリボンが結ばれていたから。

？ きっとそれは、破局の序章

「返信。」

ジェルミナル

芽月二十の日、サマランカから宣戦布告、箝口令発令。長くはもたない。布告内容は『神子による皇帝暗殺未遂の報復』。教会もサマランカ側に着いた。

こちらは事実無根と考えるが、布告内容により国民の不安を煽ることは必至。既に不信感による一般士官の暴走も起こっている。よって我々は神子に対する直接的援助は行わないものとする。

ジェルミナル

芽月二十二の日、防衛戦の準備を開始。

疑いを、晴らせ」

リコリス・インカルナタはまだ夜も明けない闇の中、指先に灯した魔術による炎を頼りに手紙を読み終えた。焦っていたのか、地の言葉と公式文書用の言葉がごちゃまぜになっている。

密書に用いる通例的な隠蔽方法、あぶり出しで書かれた文字は流麗な筆記体。サインがなくても独特な癖でわかる、これは紛れもなく第二王子アルバートによる直筆の手紙だった。

若干焦っているようでありながら簡潔な文は、昨日エレアノール・スコットに聞いた内容とまったく同じ。厄介なことになった、という気苦労半分、裏切られたような悲しみ半分の溜め息をもらす。

もう一度手紙を見ると最後の方に書かれた日付は昨日の物。

「ずいぶん早かったのね、お疲れ様」

と、リコリスは寄りかかっていた塀に止まっている伝書鳩に声をかける。当然鳩が何かを返すわけでもなく、目をパチクリさせただけだった。

このイリスの住まいがあるのは、暗黒街の一角だが明け方ともなるとさすがに街は静かだ。戸口から階段が伸び、二階までの階段をがある。リコリスがいる階段の踊場から白みかけた空の下、遠くに小さくアーガイル駐屯基地が見えた。数日前はあそこの窓から、ここを眺めていたのに、と息を吐いて手紙をしまう。

「疑いを晴らせ」。それも支援は一切なしで。

要するに単独、もっと言えば隠密行動しろということだ。たったひとり、クロードを連れて行くとしても二人だけでティターニアから

脱出しサマランカ皇室を納得させなければならない。恐らくこの暗殺未遂はもう一人の黒髪の仕事、とすると彼あるいは彼女を捕らえるのが一番の得策だろう。今回の宣戦布告に教会が絡んでいるのが若干不安ではあるが。

教会の象徴ともいえる、神子リコリス・インカルナタへの敵対行為。こういうのもなんだが、暗殺未遂程度の汚点で、容易く教会が神子、ひいてはティターニアの敵になるとは思えない。

（何が何でもそういう疑惑は叩き潰すはずだわ）

それほどまでに、教会は神子という力を頼りにしているのだ。

神子本人に還俗されようが、嫌われようが、表面上だけでも何気ない風を装うはず。歴代神子にそうしてきたように。

育ての親ともいえる教会に裏切られた傷を無理やり広げるようにして考える。

（あいつらは大義とかで動くような連中じゃない。何かあるはずよ）

しかしかねてから持っていた疑いは無限に広がる。信頼と不信の矛盾に満ちた自分の感情を無視して考える。その彼女に、

「お姉様」

控えめに声をかけられた。

顔をあげると、戸口の前にピンク色の髪の少女が立っている。

どうしたの、と声をかけるとエレアは一段、階段を上がって答えた。

「私、ずっと考えていたんですが、やはりわかりませんの」

冷たい風が背後から吹き付けて、一時的に術を解いたりコリスの黒髪をさらう。磨かれた黒の視線はまさに夜のように冷たく、エレアを刺した。

対するエレアはその視線を受け止め、ひとつひとつ言葉を噛みしめるように話しながら、階段を上る。

「つまり、神子の弱点とは、ひとつの才能が秀でた分だけ、ほかの能力が極端に落ちる。お姉様に、運動能力がないように。だからお姉様は魔力を身体中に張り巡らせて、筋力や体力を無理矢理に上げている——そういうことでしたわね？」

リコリスは無言で頷いた。

遂にリコリスと同じ踊場までたどり着いた彼女は、柵によりかか

って続けた。戸口の方を向いたままのリコリスより、町の方を見るエレアの方が、少しだけ背が高い。

「辻褄が合いませんの」

なにが、とはリコリスは言わなかった。この期に及んで、エレアには隠していたことがある。

「どうしてあの時、話して下さいませんでしたの」

「正直、あんまり言いたい話じゃなかったし、雰囲気には吞まれてくれないかなーと思ってたわ」

風が吹いて、黒髪とピンク髪が同時に揺れた。

「そういう誤魔化し方、クロード大尉にそっくりですわ」

顔を見なくても、渋い顔を作っていることがわかる。

「その神子の能力が《境界を超え》ないための措置だとしたら、お姉様がそんな裏技を使えるわけがありません。境界は絶対です、越えたからにはそれ相応の対価があったはず。その対価を出してもいいと言うほど、お姉様は何にも追いつめられていたんですか」

エレアが考えていたのはここだ。

通常の魔術でさえ、精霊との契約の元魔力を持ってかれる。境界を越えるほどの魔術の対価など、想像もつかない。成功するか否か、それよりもエレアにとって、その対価の方が恐ろしい。では何故、リコリス・インカルナタはその危険を承知してまで力を求めたのか。

リコリスはほんの少し黙り込んで、答える。風が二度吹いた。

やがて、口調だけは軽く、しかしその横顔は今にも壊れてしまい
そうな、誤魔化しの笑顔を浮かべて、言った。

「教会にいた頃、私って本当に平凡な子供だったわ」

——赤ん坊だったリコリスは、その髪の毛の背負った運命故に親に捨
てられ、教会が保護した。

それが幼い頃のリコリスが知っていた自分の生い立ちだった。
身元引受人として名のある貴族、例えばインカルナタ家が手を挙げ
ていたが、リコリス本人はそんなことをまったく知らなかった。

綺麗に整えられた黒髪に、人形のような端正な面持ちの彼女は神
子として人々に崇拜された。

ただし、それは表面上のことだ。

「私はね、最初から才能があったわけじゃなかったの」

体力がないという対価だけは顕在化していたものの、肝心の才能
の方はさっぱりだった。勉強や魔術をやらせてみても、人並みには
できるが才能と呼べるほどではない。教会長を始めとした、内
情を知るものたちはリコリスに決して優しくはしなかった。

煌びやかな教会の、灰色の部分の幼いながらもリコリスは見てい
た。

それでも彼女の先生は優しかった。頑張っても頑張っても駄目
で、いつも抜け出して泣いていた礼拝堂の隅で、二人の男の子に出
会って、それが初めての友達だった。

灰色の中の、色の付いた記憶。才能が開花しないままだったが、リコリスは少し幸せだった。

そしてリコリスは、あの声を聞いて――。
魔術の才を目覚めさせた。それはきっと、破局への序章。

リコリスは言おうとした言葉を飲み込んで、吐き捨てるようにいう。

「やっと魔術の才能が出てきて、その分、もともと低かった運動能力はさらに劣化した。それに対して先生は、かなり上から追いつめられた」
壊れそうな表情はそのままに、リコリスはエレアの方に振り返った。

「あ、……………」

魔術師だからたてられる、仮定がエレアの頭の中に現れる。

恐らくリコリスはもともと別の才能があって、その分の対価は生来の運動能力の劣化という形ですでに支払われていた。しかし、魔術の才能、つまり第二の才能が目覚めたが為に、リコリスは更に運動能力を削られる羽目になった。

リコリスの言葉に、隠しきれない怒りがにじむ。

「そう、当然先生もそう思っていたけどあくまで仮説。教会はその証拠能力の低さにつけこんで先生を追い詰めた」

そして、《先生》は壊れた。

「先生は魔術の才能が目覚めたばかりの私に、体力強化のための術式を仕込ませた」

訳もわからず、幼い少女は今までにないくらいの怒声を上げる師に逆らう術もなく、術式を刻んだ。

そして、成功してしまった。

リコリスは手袋に包まれた腕を抱く。目に見えるような印はないながらも、たしかにそれは残っている。皮肉なことに、それは成長したリコリスにとって欠かすことのできない力となって。

それでも、この事件は彼女の心に深い傷を負わせた。

「まあ、この術式には助けてもらってるし、欠点と言えば昏睡状態になったときに術が一時的に切れること、切れた後、使いすぎた反動として筋肉痛になることかしら」

無理に明るく言って、大きく伸びをした。

夜はすでに空けかけて、空は群青から青、青から日の出の橙色と綺麗なグラデーションを描いている。

「待って下さい」

おやすみ、といって歩き出したその背に、エレアノールの詰問が投げかけられる。

「まだ、その時の対価について聞いていません」

さすが、だった。

「やっぱり雰囲気には流されてくれないのね」

「当たり前です。何なんですか」

リコリスはエレアに顔だけで振り返って、言う。

「……さあ、ね？」

結局のところ、それは本当に本人にもわからないのだ。

もしかして、と思うのはひとつあるけれども、それも結局「ただの仮説」なのだから。

？ カルタナ騎士団

リコリス・インカルナタ。

最強の神子とも呼ばれた天才魔術師。 教会から還俗後、魔術師の名家、インカルナタの養女となる。

若干十六才にして軍のエリートの名詞、ティターニア王国軍第三師団の副師団長に就任。

彼女の武器は圧倒的な魔力運用、多重作業マルチタスクを用いた魔術の多重展開、英才教育によって培われた術式の構成型力。

以前の独立戦争介入の際は最後衛にて敵勢力の術式崩壊スペル・アウトを引き起こし、一個師団を壊滅させたと言われた、まさに生ける伝説。

そんな彼女が、一傭兵の家で作戦会議をしているのはあまりに似つかわしくない、とイリス・クロイツァーは目の前の状況を見て、笑うしかないのだった。

当の神子様——幻惑術をかけ直したのか、亜麻色の髪と翠の瞳だ——はというと、傷だらけの机に地図をいっぱい広げて、政治だの宗教上のだのなにやら小難しい話をしていた。

さっぱり理解できない内容からさっさと引き上げることにしたイリスは傭兵として持っていた彼らの情報を吟味することにしたのである。

所属するギルドから随分前に渡されていた書類に視線を戻す。

高価なはずの紙が惜しげもなく使われているのは、ギルドの成り立ちを考えれば普通のことだ。イリスはリコリスのページを数枚飛ばした。このあたりは彼女の魔術研究や戦果についてまとめられていたが、それよりもみたいものがあつた。

――クロード・ストラトス。

イリス・クロイツァーの読みを答えた彼に抱いた違和感が、昨晚から消えないのだ。だからなんとなく、彼を優先することにした。

リコリスの話を真剣に聞く彼の表情は軍人らしく引き締まっている。一見リコリスが主導権を握っているように見えるが、実のところ最後に意見を求められるのは彼、のように見える。その関係性もなんとなく腑に落ちない。

イリスは視線を戻す。

クロード・ストラトス、十八歳。

騎士の家ストラトスの次男。修行と称し、幼少期よりアルバート第二王子と共にテイターニア教会に入る。神子リコリス・インカルナタとも教会内で出会ったとされる。

十四歳で還俗、テイターニア王国軍第一師団に配属。二年後、第三師団に転属、リコリス・インカルナタの部下となる。これはリコリス・インカルナタ警護のため――。

「ちょっとイリス、聞いてます?」

隣のエレアノールが怪訝な声を出す。顔を上げればエレアは心配げに、奥に立つリコリスは苛立たしげにイリスを見つめている。

「あー、聞いてないや。ごめん」

イリスがそう言うときリコリスは今にも舌打ちしそうなくらいな顔で言う。

「あのね、あなただっぴ一緒に行くんでしょ？　だったらこの街の警戒を突破しなくちゃならないのはわかってるわよね！」

ばん！と机を叩いたリコリスに美人が台無しだぞ、と返してやる。イリスは調査書のリコリスの項にあった「プライドが高い」という一文を思い出す。おそらく、自分の部下に刃向かわれたことが悔しいのだろう。それともたかが一傭兵に頼らなければならないこの状況に苛ついているのか。

「び、美人とか……！　そういうお世辞言つときゃなんとかなるとか思わないでよね！」

「思ってたねーよ。あと悔しいのはわかるけどカリカリすんな。別にあたしはあんたらに協力しなきゃいけない道理はない」
癪癪をしょっちゅう起こされてはたまらない。

冷たく言うと、リコリスは表情を引き締めた。さっきまで赤面していたようには思えない表情。

基本的にイリスは権力だとか名声だとかいうものが大嫌いだ。その点で貴族ぶった話し方をするエレアノールと話があったのは珍しい。目の前のリコリス・インカルナタは神子で名家の養女と、紛れもなくその象徴であり、なによりその態度が気に入らなかった。

睨み合う二人を観察するクロードにしてみれば面白い構図だった。

リコリス・インカルナタはイリスが思うほど高圧的な人間ではない。確かに幼い頃から大人の汚い部分を見てきたせいで年の割には冷徹すぎる所もあるが、素直に人の悲しみに涙し、喜びを歓迎することが出来る少女だ。礼儀もある、最初にここに来たときに頭を下げたのがその証拠だ。しかし自衛のため、相手に足元を見られまいと取る態度がイリスの気に障ったらしい。

（素直なほうがよっぽど話になったのにな）

クロードが彼女と話したのは昨日と、いつかの酒場での騒ぎの時だったがそれくらいはわかっていた。

「イリス、お前だって無関係じゃないんだろ？ だから今朝、お前から情報提供を申し出たんだろう」

「情報提供じゃない、心当たりがあるから手を貸せて言ったんだ。別にクロード、アンタひとりでもいい。このお嬢サマがいる必要性はない」

イリスとリコリスは視線を逸らさない。殺気が出まくっている二人をよそに、クロードとエレアノールは顔を見合わせる。

（似た者同士って感じだな）

（同族嫌悪のようですね……）

はあ、と人知れずため息をついたエレアノールはひとまずまとめる。

「護衛対象の商人や市民の移動が止まる戦争は儲からない、だから停戦に協力したいんじゃないやありませんでしたの。イリス？」

「リコリスだって戦力は多い方がいいに決まってるだろう？ 三人だけじゃどうしても手が足りない」

いかにリコリスが多重作業マルチタスクを用い、魔術の手数が多かろうと、それでもタイムロスが生じる。振り上げた剣を降ろすだけの時間と詠唱から発動までの時間でもどうしても釣り合わないからだ。リコリスだけの一騎打ちならまだ対処の仕様があるものの、囲まれたときにはどうしようもない。

「……わかったよ、だけどアンタからの利益も情報もないんじゃない、完全に信用できないよ。情報を完全に明かすことは、できない」

未だに手の内を明かさないイリスに、エレアノールは「ちょっと！」と叫びかけ、リコリスが細腕を上げて制止した。

こういうときのリコリスの制止は、クロードやエレアノールとは違った意味の「制止」だ。相手の要求を理解し、非の打ち所のない完璧な方法を提示する。ときに相手の要求を妥協させてまで、だ。

リコリスはそんな時、まるで難題をぶつけられたのを喜ぶかのような笑顔を浮かべる。人形のように端正な顔に、触れれば壊れてしまいそうな華奢な雰囲気とこの強い挑戦的な笑みは神秘的な魅力にすらなる。

「利益なしでは動かないと？ 骨の髄まで傭兵ね」

ふん、と鼻を鳴らしたイリスにリコリスは言った。

「では、イリス・クロイツァー。あなたを傭兵として雇います」

予想通り、と言わんばかりにクロードは口の端を釣り上げた。

イリスの方はリコリスを見て「そうきたか」と言う。

イリスの属する傭兵ギルドは、確かに傭兵らしく素行は悪い。

が、その名の由縁からか、一度正式に契約を結べば、どんなことがあろうが最後まで遂行するという信念を持ち合わせている。ギルド発足の理由といい、その名を冠することになった理由といい、あらゆる面で異端なこのギルド。

イリスは小さく舌打ちして、しかし不敵に笑う。

「前にやりあったくらいだから、忘れてると思ったんだけど？ 名付け親さん」

「アルがこんなの作ってたなんて知らなかったのよ。しかも子供時代の思い出まで持ち込むなんて」

リコリスも今ここにいない幼なじみをからかうように、しかし慈しむように笑う。

——第二王子アルバートの指示で作られた、民間による「騎士団」。

それはあまりにも横暴なギルドに国民が頼らないように、と作らせたもの。騎士団でありながら民間であるが故に、軍の支配を受けない彼らは貴族から反感を買いながらも国民の信頼を勝ち得た。

その名も、カルタナ騎士団。

リコリス・インカルナタが幼少期、「国を守る軍を作る」と言っ

たアルバートに、戯れに教えた名前である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5133r/>

真っ黒少女と六つの約束

2011年10月9日13時07分発行